

植物調査結果

(1) 調査結果の概要

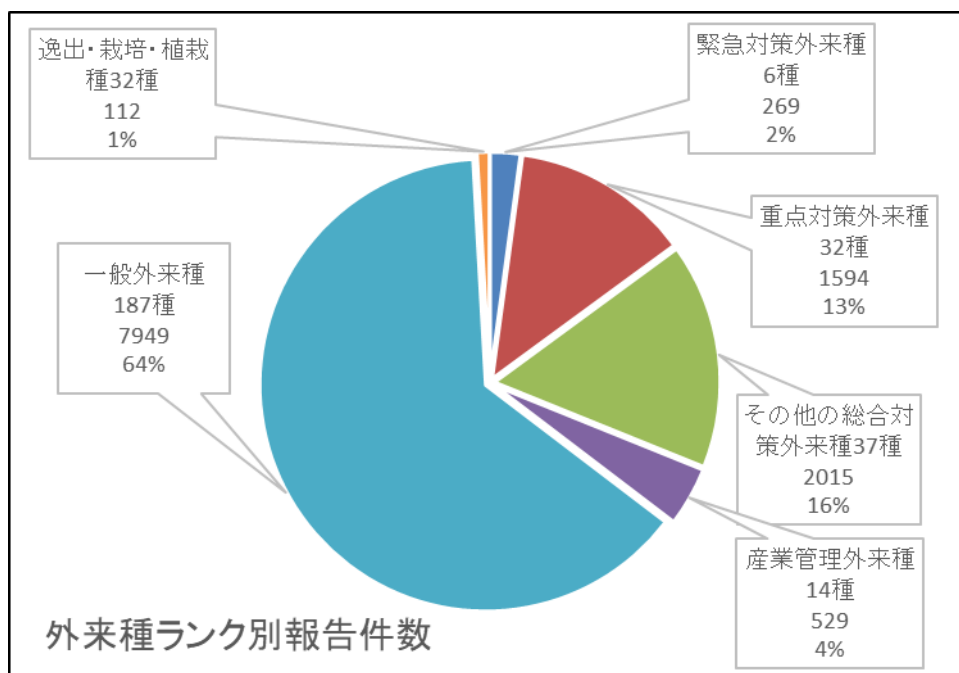
今年度（平成 29 年度）春からはじめた外来種に係るモニタリング調査のうち植物調査についてその概要を整理した。植物の外来種報告件数は 308 種 12468 件（昨年度は 245 種 11341 件）であった。昨年度に比べて種にして 1.26 倍、件数にして 1.10 倍であった。

内訳は、円グラフで示すように、特定外来生物でかつ「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（以下、生態系被害防止外来種リストという。）」にある総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急対策外来種（以下、「緊急対策外来種」という。）の報告件数は 6 種 269 件であった。

また総合的に対策が必要な外来種のうち、重点対策外来種は 32 種 1594 件、同じくその他の総合対策外来種は 37 種 2015 件であった。

さらに適切な管理を必要とする産業上重要な外来種（以下、「産業管理外来種」という。）は 14 種 529 件であった。

それ以外の一般外来種は 187 種 7949 件、栽培・逸出・植栽種は計 32 種 112 件であった。



No	外来種ランク別	報告件数	合計
①	緊急対策外来種6種	269	89 種 4407 件
②	重点対策外来種32種	1594	
③	その他の総合対策外来種37種	2015	
④	産業管理外来種14種	529	
⑤	一般外来種187種	7949	219 種
⑥	逸出・栽培・植栽種32種	112	8061 件
	合計308種	12468	308種 12468件

今回の報告件数 12468 件の内訳をみると、環境省の生態系被害防止外来種リストに挙げられている ①緊急対策外来種、②重点対策外来種、③その他の総合対策外来種、④産業管理外来種の報告件数は 4407 件（全件数の 35.3%）、それ以外の⑤一般外来種等（⑥逸出・栽培・植栽種を含む）は 8061 件（64.7%）であった。

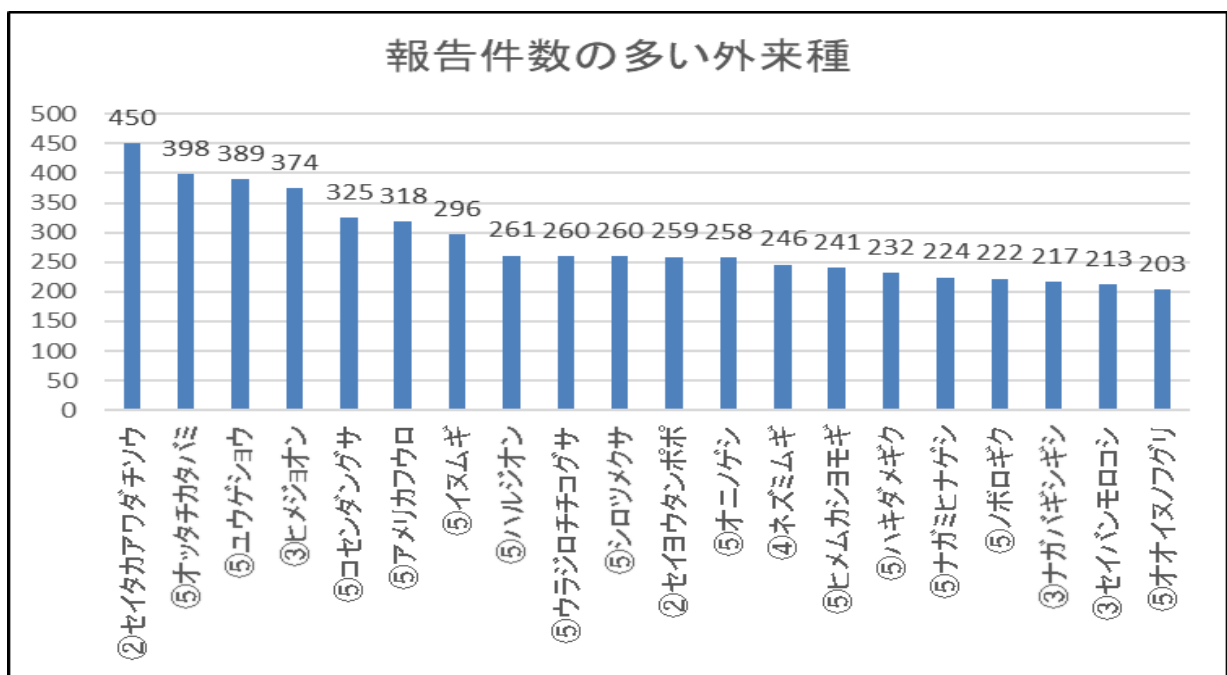
報告データの整理について

報告データを集計するにあたりいくつかの課題があった。植物の和名については同一種に対して別名が存在することが多く、これらを標準名に統一する必要があった。以下の表に基づいて変更した。そのほか誤字等については適宜正名に修正した。

この名を	こちらの標準和名に変更	この名を	こちらの標準和名に変更	この名を	こちらの標準和名に変更
アイロゼキショウ	ルリニワゼキショウ	キュウイフルーツ	キュウイフルーツ	ハルジオン	ハルジオン
アイロニワゼキショウ	ルリニワゼキショウ	クレソン	オランダガラシ	ハルジョオン	ハルジオン
アイノコタンポポ	アイノコセイウタンポポ	クワ	マグワ	ハルノノゲン	ノゲン
アオツツラフジ	アオツツラフジ	ゲンバイロギク	ペラペラヨメナ	ヒメジオン	ヒメジョオン
アキノゲン	アキノノゲン	ジシバリ	ヂシバリ	ピロドモウズイカ	ピロドモウズイカ
アツバウンラン	マツバウンラン	シンジュ	ニワウルシ	ヒロハウシノケグサ	ヒロハウシノケグサ
アメリカネナシカヅラ	アメリカネナシカヅラ	タラ	タラノキ	ヒロハギシギシ	エゾノギシギシ
アレチマツヨイグサ	マツヨイグサ	チヂミザサ	ケチヂミザサ	ヒロハホウキグサ	ヒロハホウキギク
イヌクイモ	クイモ	トウグワ	マグワ	ホウキグサ	ホウキギ
イノコズチ	イノコズチ	ニセアカシア	ハリエンジュ	ホソバアキノノゲン	アキノノゲン
ウラジロチチコグサ	ウラジロチチコグサ	ノジヤ	ノヂヤ	ボタンズル	ボタンズル
エビズル	エビズル	バーベナ・テレナ	バーベナ・テネラ	ミノゴメ	カズノコグサ
オオカワジサ	オオカワヂシャ	ハコベ	コハコベ	ヤブガラシ	ヤブカラシ
オオカワジシャ	オオカワヂシャ	ハナダイコン	シヨカツサイ	ヤブタデ	ハナタデ
オオキンケイギク	オオキンケイギク	バラモンギク	キバナムギナデシコ		
カラシナ	セイヨウカラシナ	バラモンジ	キバナムギナデシコ		

報告件数の多い外来種

今年度の報告は単年度集計とし、昨年度の報告と比較できるようにした。今年度の報告件数の上位 20 種について下にグラフを示す。最も多かった 1 位は昨年度と同じ②重点対策外来種のセイタカアワダチソウ 450 件であった。続いて 2 位は⑤一般外来種であるオッタチカタバミ、3 位は同じく⑤のユウゲシヨウであった。4 位は③のヒメジョオン、5 位は⑤一般外来種のコセンダングサとなる。2～4 位は昨年度と異なる。



この上位 20 種の中に①緊急対策外来種は出てこない。26 位でアレチウリ 174 件が現れる。②重点対策外来種は 2 種、③その他の総合対策外来種は 3 種、④産業管理外来種は 1 種、⑤一般外来種は 14 種である。

それでは上位 40 種で見るとその割合はどうなるか、上位 60 種はどうなるか、これらを整理したものが次の表である。この表から昨年度に続いて興味深いことが再確認できた。一般外来種に注目すると、上位 40 種なら 27 種、上位 60 種なら 38 種、上位 80 種なら 46 種、上位 100 種なら 59 種となっている。それぞれ約 6 割を

占めている。外来種だけに限定してみると、それなりに互いにバランスをとりながら生育していることを思わせる。

No	外来種ランク	最多20種	最多40種	最多60種	最多80種	最多100種
①	緊急対策外来種	0	1	2	3	3
②	重点対策外来種	2	5	7	11	13
③	その他の総合対策外来種	3	6	10	16	19
④	産業管理外来種	1	1	3	4	6
⑤	一般外来種	14	27	38	46	59
⑥	逸出・栽培・植栽種	0	0	0	0	0
	合計	20	40	60	80	100

環境別報告件数

今年度は単年度集計である。環境は昨年度と同じ4区分である。現地調査では環境が複合し、4区分のいずれにも当てはまらない場合があったのではないかと思う。しかし細かく設定すると全体の傾向が捉えられなくなる懸念もあり、いずれか1区分を選ぶことをお願いした。結果として、無記入2件、複合記入(「B,C」などとした記入)8件があり、集計から割愛した。したがって集計件数は12468-10=12458件である。環境別報告件数を全体としてみた場合、次のような結果となった。

No	外来種ランク別	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	総計
①	緊急対策外来種	14	121	75	59	269
②	重点対策外来種	147	446	514	487	1594
③	その他の総合対策外来種	141	542	609	718	2010
④	産業管理外来種	39	176	176	138	529
	①～④小計	341	1285	1374	1402	
⑤	一般外来種	600	1673	2546	3125	7944
⑥	逸出・栽培・植栽種	27	33	31	21	112
	⑤～⑥小計	627	1706	2577	3146	
	①～⑥合計	968	2991	3951	4548	12458
	合計に対する①～④の占める割合	35.2%	43.0%	34.8%	30.8%	
	12458件に対する各合計の割合	7.8%	24.0%	31.7%	36.5%	100%

全体の報告件数が最も多かった環境はD市街地4548件であった。最も少なかった環境はA雑木林968件であった。およそA:B:C:D=1:2:3:4となる。

緊急対策外来種では河川敷からの報告が圧倒的に多いことに注目する必要がある。緊急対策外来種のアレチウリ、オオキンケイギク、オオフサモ、オオカワヂシャなどいずれも河川敷で繁茂する。

また、環境別報告件数合計(①～⑥)に占める生態系被害防止外来種リスト種(①～④)の割合をみると、河川敷が43.0%で最も大きい値となっている。市街地の値は30.8%で最も低い。課題の多い外来種は河川敷に比較的好く集まっていることを感じさせる結果となった。

環境別報告件数の詳細

次頁以降は種ごとに環境別報告件数を集計したものである。

データは緊急対策外来種、重点対策外来種、その他の総合対策外来種、産業管理外来種、一般外来種、栽培種、植栽種、逸出種の順になっており、それぞれについては報告件数の多い順、同一件数の場合は五十音順に配列した。なお、昨年度一般外来種として集計した「ノゲシ」は史前帰化種であった。誤りを訂正し、これを在来種として扱い表から削除する。

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
1	アレチウリ	緊急対策外来種	8	53	40	3	104	植物 11
2	オオキンケイギク	〃	4	11	29	53	97	植物 13
3	オオカワヂシャ	〃	2	38	1	3	44	植物 12
4	ミズヒマワリ	〃		11	1		12	植物 15
5	オオフサモ	〃		8	3		11	植物 14
6	ナガエツルノゲイトウ	〃			1		1	
7	セイタカアワダチソウ	重点対策外来種	48	115	142	145	450	植物 23
8	セイヨウタンポポ	〃	26	59	75	99	259	植物 24
9	オオブタクサ	〃	21	74	71	19	185	植物 18
10	コマツヨイグサ	〃	2	33	44	61	140	植物 21
11	アイノコセイヨウタンポポ	〃	10	22	36	39	107	植物 52
12	ニワウルシ	〃	12	12	24	22	70	植物 25
13	マルバルコウ	〃	4	12	31	21	68	植物 30
14	マメアサガオ	〃		18	14	9	41	植物 29
15	シナダレスズメガヤ	〃	2	8	19	11	40	植物 22
16	アメリカアサガオ	〃	2	13	9	13	37	植物 16
17	キシヨウブ	〃	4	14	12	7	37	植物 20
18	ノハカタカラクサ	〃	5	7	3	17	32	植物 26
19	オランダガラシ	〃	4	15	10	1	30	植物 19
20	メリケンガヤツリ	〃		9	5		14	植物 31
21	トウネズミモチ	〃	1	6	3	3	13	
22	マルバアサガオ	〃	2	2	6	2	12	
23	ホテイアオイ	〃		7	1	2	10	植物 28
24	イタチハギ	〃	3	5			8	
25	ヒメイワダレソウ	〃			5	3	8	
26	ヒメマツバボタン	〃		1		7	8	植物 27
27	ツルニチニチソウ	〃		1	1	4	6	
28	アサガオ	〃	1	2			3	
29	コゴメイ	〃		3			3	
30	オオアワダチソウ	〃		1	1		2	植物 17
31	ナガバオモダカ	〃		2			2	
32	ランタナ	〃		2			2	
33	ルコウソウ	〃		1		1	2	
34	アカミタンポポ	〃				1	1	
35	コカナダモ	〃		1			1	
36	スイレン	〃			1		1	
37	タテバチドメグサ	〃			1		1	
38	チチブフジウツギ	〃		1			1	
39	ヒメジョオン	その他の総合対策外来種	36	71	123	143	373	植物 43
40	ナガバギシギシ	〃	12	78	64	61	215	植物 41
41	セイバンモロコシ	〃	4	72	63	72	211	植物 38
42	アメリカセンダングサ	〃	14	43	74	40	171	植物 33
43	アメリカオニアザミ	〃	11	24	34	95	164	植物 32
44	セイヨウカラシナ	〃	4	57	31	25	117	植物 39
45	シマスズメノヒエ	〃	10	27	28	30	95	植物 37
46	エゾノギシギシ	〃	11	31	29	20	91	植物 35
47	ムシトリナデシコ	〃	2	12	23	38	75	植物 45
48	アレチヌスビトハギ	〃	13	18	20	16	67	植物 34
49	ヒメツルソバ	〃	1	4	8	36	49	植物 44
50	オオオナモミ	〃	1	22	21	4	48	植物 36
51	タカサゴユリ	〃	1	3	9	34	47	植物 40
52	ハルシャギク	〃	1	16	13	12	42	植物 42
53	ハナニラ	〃	5	8	8	16	37	植物 53
54	ヤナギハナガサ	〃	1	6	8	21	36	植物 54
55	フランスギク	〃	3	8	9	14	34	植物 55

表 外来種の環境別報告件数(1)

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
56	メリケンカルカヤ	その他の総合対策外来種つづき	3	3	12	15	33	植物 46
57	アレチハナガサ	〃	1	10	7	3	21	
58	シャクチリソバ	〃	1	9	8	1	19	
59	ホシアサガオ	〃		4	2	6	12	
60	キシウスズメノヒエ	〃	2	4	2		8	
61	ヒメヒオウギズイセン	〃	1	1	4	2	8	
62	アメリカネナシカズラ	〃	1	3	2		6	
63	オオクサキビ	〃	1	2	2	1	6	
64	オオキバナカタバミ	〃				5	5	
65	ナンキンハゼ	〃		1	1	3	5	
66	ヒメスイバ	〃		1	2		3	
67	ツルドクダミ	〃	1			1	2	
68	ハルガヤ	〃		1		1	2	
69	ハルザキヤマガラシ	〃		2			2	
70	アラゲハンゴンソウ	〃			1		1	
71	シンテツポウユリ	〃				1	1	
72	タチバナモドキ	〃		1			1	
73	チョウセンアサガオ	〃			1		1	
74	ペラペラヨメナ	〃				1	1	
75	ヨウシュチョウセンアサガオ	〃				1	1	
76	ネズミムギ	産業管理外来種	10	77	81	78	246	植物 49
77	ハリエンジュ	〃	9	24	19	15	67	植物 50
78	ホソムギ	〃	5	22	23	16	66	植物 51
79	ナヨクサフジ	〃	5	27	16	7	55	植物 48
80	カモガヤ	〃	2	10	9	8	29	植物 47
81	オニウシノケグサ	〃	1	8	9	6	24	植物 56
82	ナギナタガヤ	〃	1	1	6	5	13	
83	アメリカスズメノヒエ	〃	2	1	5	1	9	
84	オオアワガエリ	〃		4	1		5	
85	コヌカグサ	〃		1	2	1	4	
86	マダケ	〃	1		3		4	
87	モウソウチク	〃	1		2	1	4	
88	キウイフルーツ	〃	2				2	
89	ハチク	〃		1			1	
90	オッタチカタバミ	一般外来種	32	69	125	172	398	植物 57
91	ユウゲショウ	〃	21	80	128	158	387	植物 58
92	コセンダングサ	〃	32	70	125	98	325	植物 59
93	アメリカフウロ	〃	17	68	117	116	318	植物 60
94	イヌムギ	〃	20	84	82	110	296	
95	ハルジオン	〃	33	51	85	91	260	
96	ウラジロチチコグサ	〃	20	35	68	137	260	
97	シロツメクサ	〃	17	59	102	82	260	
98	オニノゲシ	〃	21	50	94	91	256	
99	ヒメムカシヨモギ	〃	18	38	78	107	241	
100	ハキダメギク	〃	19	25	112	76	232	
101	ナガミヒナゲシ	〃	8	41	57	118	224	
102	ノボロギク	〃	6	29	109	78	222	
103	オオイヌノフグリ	〃	20	38	77	68	203	
104	ムラサキツメクサ	〃	9	70	64	59	202	
105	メマツヨイグサ	〃	14	61	53	72	200	
106	オランダミミナグサ	〃	12	35	62	90	199	
107	ヘラオオバコ	〃	7	80	46	60	193	
108	ヨウシュヤマゴボウ	〃	30	23	50	75	178	
109	コニシキソウ	〃	12	17	51	70	150	
110	ヒメオドリコソウ	〃	19	33	41	51	144	

表 外来種の環境別報告件数(2)

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
111	アメリカイヌホオズキ	一般外来種つづき	15	21	47	56	139	
112	マメグンバイナズナ	"	6	24	51	41	122	
113	チチコグサモドキ	"	6	11	27	76	120	
114	アレチギンギン	"	5	37	36	37	115	
115	ムラサキカタバミ	"	10	20	28	57	115	
116	イモカタバミ	"	10	14	22	57	103	
117	オオニシキソウ	"	13	17	45	28	103	
118	キクイモ	"	8	37	36	22	103	
119	オオアレチノギク	"	6	14	35	47	102	
120	タチイヌノフグリ	"	9	17	22	45	93	
121	ショカツサイ	"	11	20	24	30	85	
122	コハコベ	"	9	16	23	32	80	
123	ワルナスビ	"	6	18	20	32	76	
124	ニワゼキショウ	"	5	15	20	34	74	
125	ホソアオゲイトウ	"	5	15	33	16	69	
126	ヒルザキツキミソウ	"	3	8	15	37	63	
127	ツルマンネングサ	"	1	19	11	25	56	
128	メキシコマンネングサ	"	3	6	9	32	50	
129	ブタナ	"	6	7	17	18	48	
130	ミチタネツケバナ	"	2	7	7	24	40	
131	ツボミオオバコ	"	2	7	14	15	38	
132	オシロイバナ	"	2	9	6	20	37	
133	セイヨウアブラナ	"	4	16	11	6	37	
134	ゴウシュウアリタソウ	"	1	6	16	13	36	
135	カキネガラシ	"	3	14	8	10	35	
136	コバンソウ	"	1	4	2	26	33	
137	コメツブツメクサ	"	1	11	7	11	30	
138	アカザ	"	2	3	15	8	28	
139	セリバヒエンソウ	"	9	13	3	3	28	
140	タチチチコグサ	"		2	10	15	27	
141	オオスズメノカタビラ	"	3	7	7	8	25	
142	アレチノギク	"	2	3	4	14	23	
143	ハゼラン	"	2	3	1	17	23	
144	キバナコスモス	"	5	3	6	8	22	
145	ゼニアオイ	"	1	4	6	11	22	
146	ダンドボロギク	"	6	7	2	7	22	
147	ヤセウツボ	"		9	3	10	22	
148	コスズメガヤ	"	2	4	5	10	21	
149	マツバウンラン	"		2	4	13	19	
150	アオスズメノカタビラ	"	1	4	5	8	18	
151	ジュズダマ	"	1	8	6	3	18	
152	アメリカカタカサブロウ	"	4	3	9	1	17	
153	キキョウソウ	"	1	1	3	11	16	
154	ヒロハホウキギク	"		9	6		15	
155	ブタクサ	"	1	2	7	5	15	
156	タチアオイ	"		4	5	5	14	
157	ベニバナボロギク	"	3	2	3	6	14	
158	アメリカアゼナ	"		2	10	1	13	
159	コスモス	"		3	7	2	12	
160	ヤグルマギク	"	1	3	3	5	12	
161	セイタカハハコグサ	"	1	2	2	6	11	
162	オランダハッカ	"		3	5	2	10	
163	イチビ	"		2	5	2	9	
164	キバナムギナデシコ	"			2	7	9	
165	ニラ	"	1	3	4	1	9	

表 外来種の環境別報告件数(3)

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
166	オキジムシロ	一般外来種つづき		4	2	2	8	
167	ビロードモウズイカ	〃	1		1	6	8	
168	ヨコハママンネングサ	〃			2	6	8	
169	アオゲイトウ	〃			1	6	7	
170	コメツブウマゴヤシ	〃		7			7	
171	ゼニバアオイ	〃		3	3	1	7	
172	タマサンゴ	〃	1	2	1	3	7	
173	アメリカヌスビトハギ	〃		6			6	
174	オオマツヨイグサ	〃		2	4		6	
175	コバナキジムシロ	〃		3	2	1	6	
176	ナガイモ	〃		2	2	2	6	
177	ハタケニラ	〃		3	1	2	6	
178	オオケタデ	〃			3	2	5	
179	オランダフウロ	〃				5	5	
180	シナガワハギ	〃		4		1	5	
181	シュウカイドウ	〃	1	1	1	2	5	
182	ツタバウンラン	〃		1		4	5	
183	ナガハグサ	〃		1	2	2	5	
184	ヒナキキョウソウ	〃		2		3	5	
185	ヒメコバンソウ	〃	1			4	5	
186	マツヨイグサ	〃		1		4	5	
187	アリタソウ	〃		1	2	1	4	
188	スイセンノウ	〃		1	2	1	4	
189	ナガエコミカンソウ	〃			2	2	4	
190	ナンバンカラムシ	〃		2	1	1	4	
191	ヒメキンセンカ	〃			2	2	4	
192	ヒレハリソウ	〃		1	2	1	4	
193	ホソバヒメミソハギ	〃			4		4	
194	マルバアメリカアサガオ	〃		1	1	2	4	
195	ユキヤナギ	〃		2	2		4	
196	ヨーロッパタイトゴメ	〃				4	4	
197	ホウキギ	〃	1		2	1	4	
198	アメリカスミレサイシン	〃	1			2	3	
199	イヌカキネガラシ	〃		1		2	3	
200	ウサギアオイ	〃			1	2	3	
201	カラクサナズナ	〃		3			3	
202	コシロノセンダングサ	〃	1	2			3	
203	ハナカタバミ	〃		1	1	1	3	
204	ヒナゲシ	〃		1	1	1	3	
205	ヒレタゴボウ	〃		1	1	1	3	
206	ホウキギク	〃		1	2		3	
207	ホソバオオアマナ	〃	2	1			3	
208	ホソバツルノゲイトウ	〃		1		2	3	
209	ホナガイヌビユ	〃		1	2		3	
210	マルバハッカ	〃			2	1	3	
211	ムクゲ	〃		2		1	3	
212	モミジルコウ	〃		1	2		3	
213	アメリカキンゴジカ	〃	1		1		2	
214	アレチニシキソウ	〃		1		1	2	
215	イヌコハコベ	〃				2	2	
216	ウスベニアオイ	〃				2	2	
217	オオニワゼキショウ	〃			2		2	
218	オニゲシ	〃		1		1	2	
219	カラスノチャヒキ	〃		2			2	
220	キレハイヌガラシ	〃			2		2	

表 外来種の環境別報告件数(4)

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
221	ケアリタソウ	一般外来種つづき		2			2	
222	セイヨウミヤコグサ	"	2				2	
223	タマダレ	"		2			2	
224	ツルノゲイトウ	"		2			2	
225	ヒレアザミ	"		1	1		2	
226	ヒロハノウシノケグサ	"			1	1	2	
227	フウセンカズラ	"				2	2	
228	ホオズキ	"			1	1	2	
229	マツバゼリ	"		2			2	
230	ムラサキウンラン	"				2	2	
231	ヤクナガイヌムギ	"		1	1		2	
232	ルリニワゼキショウ	"		1		1	2	
233	アケボノセンノウ	"				1	1	
234	アメリカツノクサネム	"			1		1	
235	アライトツメクサ	"		1			1	
236	ウスベニチチコグサ	"				1	1	
237	エダウチチチコグサ	"		1			1	
238	エノキアオイ	"				1	1	
239	オキナアサガオ	"				1	1	
240	オノマンネングサ	"			1		1	
241	オハツキガラシ	"			1		1	
242	カミツレ	"			1		1	
243	カラクサシュンギク	"			1		1	
244	キバナバラモンジン	"			1		1	
245	キレハマメグンバイナズナ	"				1	1	
246	キンシバイ	"				1	1	
247	クルマバザクロソウ	"			1		1	
248	グンバイナズナ	"		1			1	
249	コウヤカミツレ	"				1	1	
250	コエンドロ	"			1		1	
251	シヨクヨウガヤツリ	"			1		1	
252	シロバナシナガワハギ	"			1		1	
253	シンジュボシマンネングサ	"				1	1	
254	セイヨウジュウニヒトエ	"				1	1	
255	セイヨウノコギリソウ	"				1	1	
256	セイヨウフウチョウソウ	"			1		1	
257	セイヨウヤブイチゴ	"				1	1	
258	セッカニワゼキショウ	"		1			1	
259	タカサゴフヨウ	"		1			1	
260	テリミノイヌホオズキ	"			1		1	
261	ナツズイセン	"	1				1	
262	ニオイスマレ	"	1				1	
263	ニオイタデ	"		1			1	
264	ノゲイトウ	"			1		1	
265	ノヂシャ	"		1			1	
266	ハイミチヤナギ	"		1			1	
267	ハナトラノオ	"		1			1	
268	ハナヤエムグラ	"			1		1	
269	バラモンジン	"		1			1	
270	ヒメグンバイナズナ	"		1			1	
271	フラサバソウ	"		1			1	
272	ベニカタバミ	"				1	1	
273	ホソミキンガヤツリ	"		1			1	
274	ムギクサ	"				1	1	
275	ユメノシマガヤツリ	"		1			1	

表 外来種の環境別報告件数(5)

No	和名	区分	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数計	解説頁
276	ローマカミツレ	一般外来種つづき		1			1	
277	ムラサキツユクサ	栽培種		1	3	4	8	
278	シソ	〃	1	3	1	2	7	
279	マツバギク	〃			1	4	5	
280	ヒメビジョザクラ	〃			2		2	
281	カンナ	〃		1			1	
282	ノアサガオ	〃			1		1	
283	センダン	植栽種		2	2		4	
284	アキノレ	〃		3			3	
285	スギ	〃	3				3	
286	ヒノキ	〃	3				3	
287	ノウゼンカズラ	〃	1		1		2	
288	モチノキ	〃	2				2	
289	イチヨウ	〃	1				1	
290	ソシンロウバイ	〃	1				1	
291	ヤツデ	〃	1				1	
292	ヤブニッケイ	〃			1		1	
293	マグワ	逸出種	2	9	4	1	16	
294	シュロ	〃	2	1	3	2	8	
295	カジノキ	〃	1	4	2		7	
296	マンリョウ	〃	2	1	2	1	6	
297	アブラナ	〃		4		1	5	
298	チャノキ	〃	3	1		1	5	
299	サンシクスミレ	〃		2	1	1	4	
300	イヌカタヒバ	〃	1		1	1	3	
301	オカメザサ	〃		1		1	2	
302	オモト	〃			2		2	
303	コウゾ	〃	2				2	
304	コムラサキ	〃			1	1	2	
305	ボタンクサギ	〃			1	1	2	
306	イチジク	〃			1		1	
307	カラタチバナ	〃			1		1	
308	クマザサ	〃	1				1	
		合計	968	2991	3951	4548	12458	

表 外来種の環境別報告件数(6)

(2) 種別調査結果

種別に調査結果を記述する。今回の報告は今年度の調査結果に限定した記述である。昨年度記載した種に加えて、報告件数の多かった未記載種 5 種を追加記載した。また生態系被害防止外来種リスト種と比較するため、一般外来種のうち報告件数の多い4種を記載した。その他の報告件数の少ない種については、個別の記述は割愛した。これらについては、次年度以降データの蓄積を見て記載することとしたい。

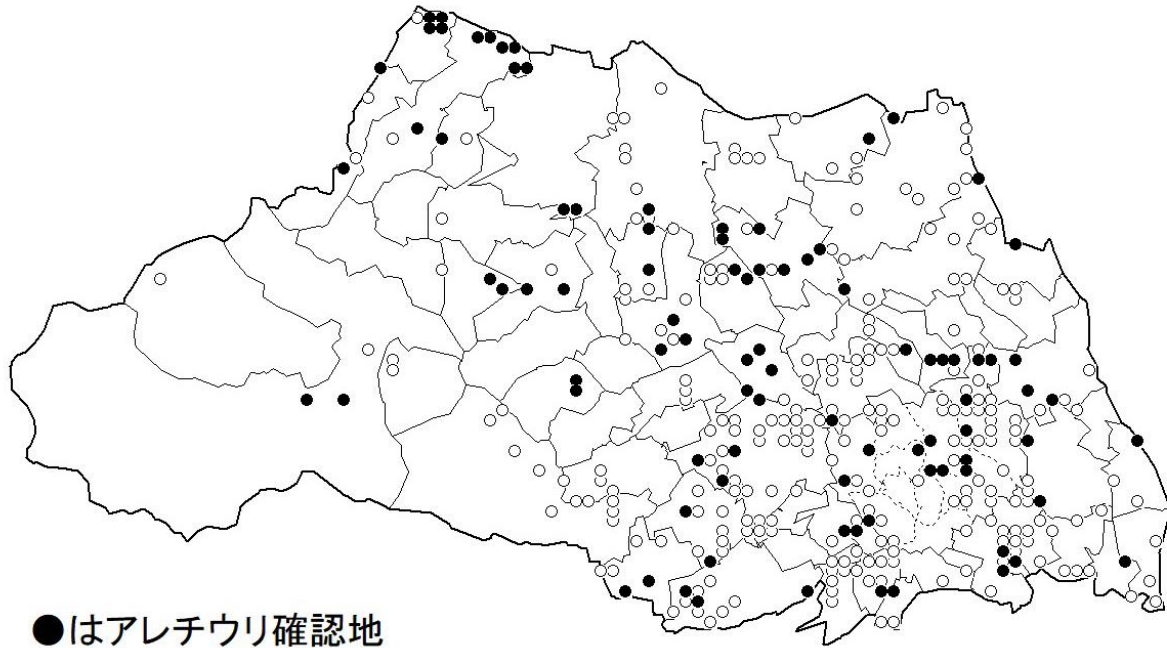
記述内容は昨年度と同様に環境別報告件数についての解説にとどめた。生活段階及び群落の大きさ・広がりについては来年度の段階で、3年間蓄積したデータをもとに記述することとしたい。

記述した種は次の 50 種である。記述の順は、No.1～41 は昨年度と同じランク順、和名順になっている。No.42～50 は今年度の追加記載種である。

(ランク順、和名順、ただしNo.42～50は平成29年度追加記載種)

No	APG科名	和名	ランク	解説頁
1	(ウリ科)	アレチウリ	特定外来生物・緊急対策外来種	植物 11
2	(オオバコ科)	オオカワヂシャ	〃	植物 12
3	(キク科)	オオキンケイギク	〃	植物 13
4	(アリノトウグサ科)	オオフサモ	〃	植物 14
5	(キク科)	ミズヒマワリ	〃	植物 15
6	(ヒルガオ科)	アメリカアサガオ	重点対策外来種	植物 16
7	(キク科)	オオアワダチソウ	〃	植物 17
8	(キク科)	オオブタクサ	〃	植物 18
9	(アブラナ科)	オランダガラシ	〃	植物 19
10	(アヤメ科)	キショウブ	〃	植物 20
11	(アカバナ科)	コマツヨイグサ	〃	植物 21
12	(イネ科)	シナダレスズメガヤ	〃	植物 22
13	(キク科)	セイタカアワダチソウ	〃	植物 23
14	(キク科)	セイヨウタンポポ	〃	植物 24
15	(ニガキ科)	ニワウルシ	〃	植物 25
16	(ツククサ科)	ノハカタカラクサ	〃	植物 26
17	(スベリヒユ科)	ヒメまつバボタン	〃	植物 27
18	(ミズアオイ科)	ホテイアオイ	〃	植物 28
19	(ヒルガオ科)	マメアサガオ	〃	植物 29
20	(ヒルガオ科)	マルバルコウ	〃	植物 30
21	(カヤツリグサ科)	メリケンガヤツリ	〃	植物 31
22	(キク科)	アメリカオニアザミ	その他の総合対策外来種	植物 32
23	(キク科)	アメリカセンダングサ	〃	植物 33
24	(マメ科)	アレチヌスビトハギ	〃	植物 34
25	(タデ科)	エゾノギシギシ	〃	植物 35
26	(キク科)	オオオナモミ	〃	植物 36
27	(イネ科)	シマスズメノヒエ	〃	植物 37
28	(イネ科)	セイバンモロコシ	〃	植物 38
29	(アブラナ科)	セイヨウカラシナ	〃	植物 39
30	(ユリ科)	タカサゴユリ	〃	植物 40
31	(タデ科)	ナガバギシギシ	〃	植物 41
32	(キク科)	ハルシャギク	〃	植物 42
33	(キク科)	ヒメジョオン	〃	植物 43
34	(タデ科)	ヒメツルソバ	〃	植物 44
35	(ナデシコ科)	ムシトリナデシコ	〃	植物 45
36	(イネ科)	メリケンカルカヤ	〃	植物 46
37	(イネ科)	カモガヤ	産業管理外来種	植物 47
38	(マメ科)	ナヨクサフジ	〃	植物 48
39	(イネ科)	ネズミムギ	〃	植物 49
40	(マメ科)	ハリエンジュ	〃	植物 50
41	(イネ科)	ホソムギ	〃	植物 51
42	(キク科)	アイノコセイヨウタンポポ	重点対策外来種	植物 52
43	(ヒガンバナ科)	ハナニラ	その他の総合対策外来種	植物 53
44	(クマツヅラ科)	ヤナギハナガサ	〃	植物 54
45	(キク科)	フランスギク	〃	植物 55
46	(イネ科)	オニウシノケグサ	産業管理外来種	植物 56
47	(カタバミ科)	オッタチカタバミ	一般外来種	植物 57
48	(アカバナ科)	ユウゲショウ	〃	植物 58
49	(キク科)	コセンダングサ	〃	植物 59
50	(フウロソウ科)	アメリカフウロ	〃	植物 60

1 アレチウリ(ウリ科) *Sicyos angulatus* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はアレチウリ確認地



分布状況 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、低山西で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父地方山岳地帯は少ないものの、ほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ全域分布となっている。

環境別報告件数 104 件の報告があった。生育地は河川敷が圧倒的に多く 51% を占める。河川敷に広がったアレチウリは他の植物を完全に被陰する。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	8	7.7
河川敷	B	53	51
水田・休耕田・畑	C	40	38.5
市街地	D	3	2.9
合計		104	100.1

次いで水田・休耕田・畑 38.5%、雑木林、市街地の報告は少ない。

種の概要 つるや巻きひげで他物に絡まる。花は黄白色。果実には長い毛がある。河原の泥地や土手に広がり、他の草本を完全に覆い隠す大群落となり、絶滅危惧種等の生育

に甚大な被害をもたらす可能性が高いという。在来種を被圧することは大いにあり得るが具体的情報がない。スイカ畑の近くにアレチウリが生育していた場合、スイカ果実汚斑細菌病の伝染源になる可能性があるというが、その事例はまだ聞いていない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、初出は 1952 年、静岡県で見いだされた。埼玉県の初出は 1972 年、川越市で珍しい帰化植物として記録された。その後生育地はしばらくの間、県内に散在する程度であったが、次第に分布域を拡げた。立証する十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。当該種は多くの光を要求する種で、あらゆるものを覆って広がる。覆われた一般野生植物や一般作物はその勢いが急速に減衰し、開花や結実に至ることなく枯死する例が多い。さらに調査を続行し、精度の高いデータを取得し、その実態をもとに駆除等の具体的方策を検討する必要がある。

2 オオカワヂシャ(オオバコ科) *Veronica anagallis-aquatica* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はオオカワヂシャ確認地



分布状況 今回の調査では加須中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南、低山西、低山東で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父・寄居・川本・熊谷・吹上・上尾・戸田、すなわち荒川沿いのみであった。県レッドデータブック 2011 の調査によれば入間郡一帯、利根川沿いでも確認された。

環境別報告件数 今回の調査では 44 件の報告があった。河川敷の報告が圧倒的で 86.4%を占める。残りは市街地、雑木林、水田・休耕田・畑の順であ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	4.5
河川敷	B	38	86.4
水田・休耕田・畑	C	1	2.3
市街地	D	3	6.8
合計		44	100

る。

種の概要 在来種のカワヂシャと混生することが多い。カワヂシャにくらべ、本種は大柄で目立ち、花の色彩も淡青色でメリハリがある。生活段階としては、成葉の状態は3-10月にみられる。つぼみ4-6月、開花4-6月、結実5-6月で、

時期が重なりみな同時進行の形となる。生物多様性を保全するうえで重要となる地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされるが、現時点ではその事例を聞かない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、その事例はカワヂシャとの混生であろう。しかし、両者は混生していてもカワヂシャが圧迫されているという感じはない。両種の雑種ができるのではないか、いわゆる遺伝子攪乱が懸念されているが、今のところ雑種の確認はなされていない。

当該種の消長 初記録は 1867 年、神奈川県記録がある。侵入経路等のいきさつは明らかでない。埼玉では 1998 年時点で荒川沿いに確認され、その後 20 年間に全県的な広がりを見せたと考えられる。それは県のレッドデータブック 2011 の調査からも裏付けられる。今回の調査では利根川沿いの市町村や、秩父児玉地域の報告はごくわずかであった。さらに調査すれば県内全域に生育しているといえるようになると思われる。

3 オオキンケイギク(キク科) *Coreopsis lanceolata* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はオオキンケイギク確認地



分布状況 今回の調査で本種は亜高山を除く県全域に分布することがはっきりした。県南部の都県境でも報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば秩父・両神・朝霞の限定的分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査によれば比企郡と利根川沿いを除きほぼ県の全域で確認された。総合すれば利根川沿いにはあまり分布していないということになる。

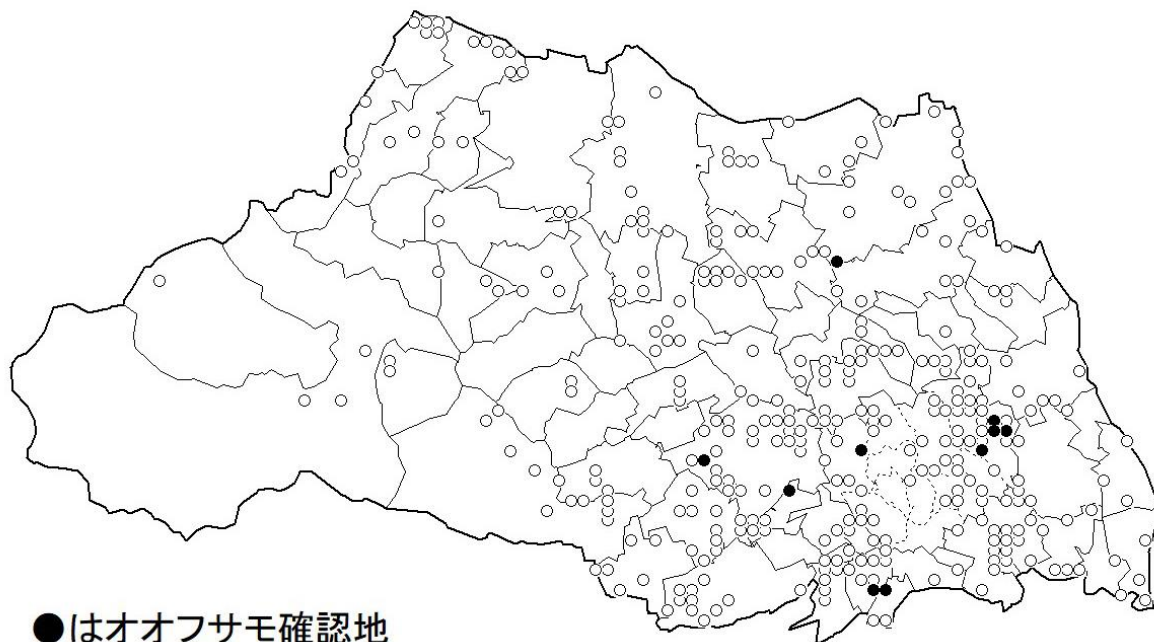
環境別報告件数 97 件の報告があった。市街地の報告が最も多く 54.6%であった。次いで、水田・休耕田・畑、河川敷にも分布を広げており、環境を選ばない傾向が強い。ただし、雑木林は例外のようでほとんど現れない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	4.1
河川敷	B	11	11.3
水田・休耕田・畑	C	29	29.9
市街地	D	53	54.6
合計		97	99.9

種の概要 黄色の大きな花が咲くのでよく目立つ。つぼみと開花と結実が同時で 5 月から 7 月に集中する。子世代は 8 月ころから始まる。落ちた種子が発芽し、偽ロゼットになり、一部は茎を立ち上げこのまま越冬する。したがって本種の生活史は約 1 年半の長さになる。全体の感じはハルシャギクに似る。花の色は本種が黄色一色であるのに対し、ハルシャギクのそれは黄色と紫褐色がモザイク状となるので明瞭に区別できる。本種の根生葉は長い柄があり大きく 1 回羽状深裂し、ハルシャギクのそれは細かく 2 回羽状深裂する。茎葉も類似するが、根生葉と同様の特徴があり、両者の区別は容易である。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、本県では絶滅危惧種と競合している実態は不明である。

当該種の消長 明治中期に栽培品として導入されが、その後逸出して野生化し、現状は無管理状態になっている。県内では 1998 年代に限定的な分布であったが、その後急激に分布範囲を広げ 2011 年代には全県分布となった。今回の調査は引き続き全県分布を維持している。増減について調査員の感触によれば「変わらず」が圧倒的に多い。「やや減少」と「やや増加」の少数意見は拮抗している。本県では安定状態に達していると考えてよいかもしれない。

4 オオフサモ(アリトウグサ科) *Myriophyllum aquaticum* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はオオフサモ確認地



分布状況 今回の調査では加須、岩槻、西区、川越、和光から報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば庄和・岩槻・八潮の限定的分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査で羽生・鷺宮・菖蒲・上尾・川越・狭山・飯能での確認が加わった。

環境別報告件数 今回の報告件数は 11 件であった。河川敷の報告が 72.7%と圧倒的に多く、水田・休耕田・畑にも報告がある。いずれも水路沿いである。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	8	72.7
水田・休耕田・畑	C	3	27.3
市街地	D	0	0
合計		11	100

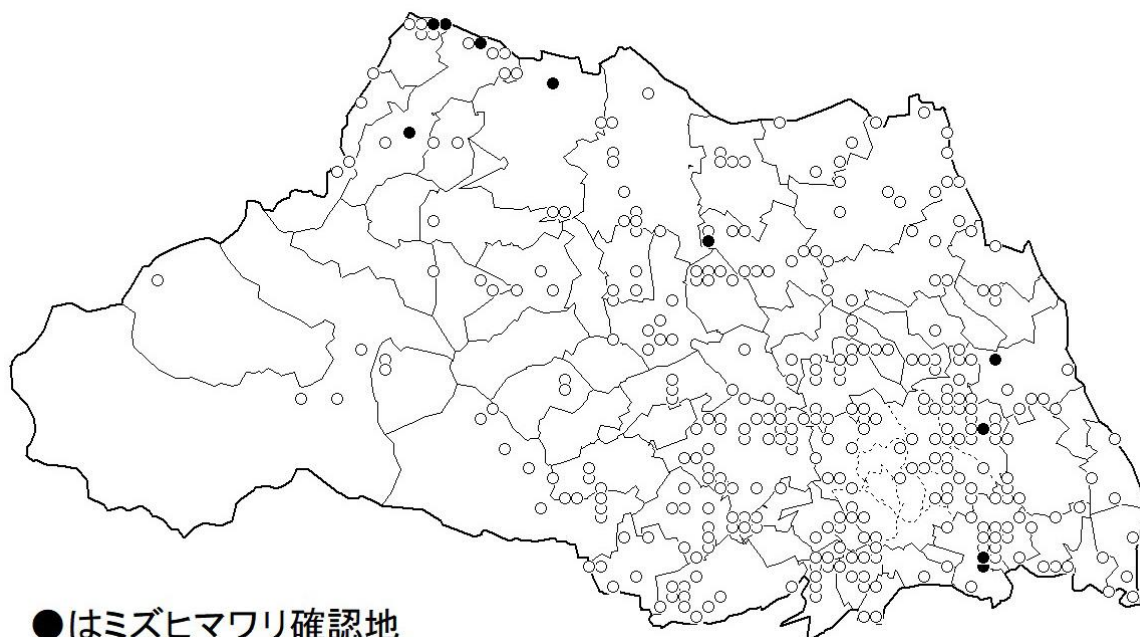
種の概要 水辺の植物である。中小河川や湖沼の縁に繁茂する。水流の緩やかなところに広がる傾向はミズヒマワリなどとよく似ている。生活段階について、幼植物をみることはない。成葉だけの状態が通年みられる。本種は年間を通して花を見ることはまれである。国内は雌株のみといわ

れる。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされ、県内ではコウホネ(県準絶滅危惧種)との競合の実態がある。現地では、両者が1本1本入り混じった混生状態にあり、オオフサモだけをそっくり取り除くことは難しい。どのような駆除方法をとれば最も効果的なのか現在検討が続いている。オオフサモの駆除についてはその手法が開発されているというが、事例ごとに適用できるか試行してみる必要がある。

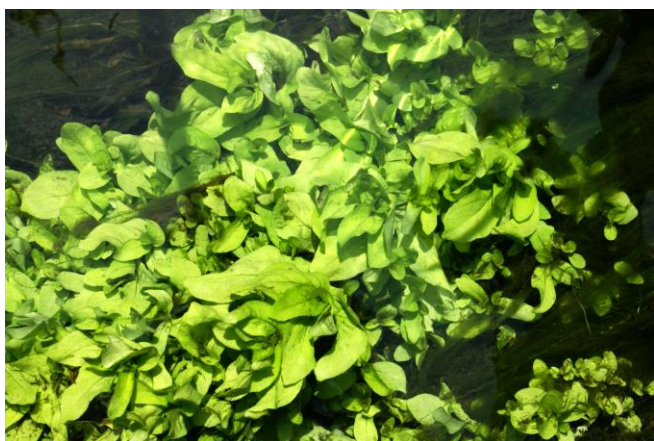
当該種の消長 大正時代に観賞用の水草として導入されたが、逸出し全国的に野生化したという。埼玉県では 1998 年代ごく限定的であったが、その後急激に分布を広げたといえる。2010 年ころは、遠目にきれいに見えることから移植し栽培している事例も見受けられ、まだ珍しい存在であった。

現在、県北部や秩父地域では報告がほとんどないので、まだ分布していないという方がいい方が妥当だろう。しかし本庄で1件の報告があるので、調査不足の要素も否定しきれない。

5 ミズヒマワリ(キク科) *Gymnocoronis spilanthoides* 特定外来生物・緊急対策外来種



●はミズヒマワリ確認地



分布状況 今回の調査では 12 件の報告があった。上里町 3 件、本庄市 2 件、川口市 2 件、深谷市、鴻巣市、岩槻区、春日部市、川口市が、1 件である。埼玉県植物誌 1998 によれば県北部の本庄・熊谷・妻沼と、県東部の蓮田・岩槻区で記録がある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では熊谷・久喜・幸手・宮代で確認されている。全部まとめると高崎線以北以東に分布していることになる。

環境別報告件数 報告件数 12 件であり、データ不足は否めないが、91.7%が河川敷での分布で、水田・休耕田・畑でも報告がある。市街地、雑木林の報告はない。川沿いに普通に生育していると考えられるので、さらに河川を中心とした調査が欠かせない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	11	91.7
水田・休耕田・畑	C	1	8.3
市街地	D	0	0
合計		12	100

種の概要 河川・池沼の端に多く生育する。生活段階としては、種子から芽生える幼植物を見つけるのは困難で、もともとあった親株から茎を横に伸ばし、葉だけが 3-11 月の長期間にわたって観察できる。つぼみと開花は 8-11 月に確認できる。生育上の特徴として、茎の切れ端が流れてどこかで停滞すると、またたくまに発根し定着する。また葉や茎の成長はきわめて早く、浅瀬では水面を覆うように広がっていく。とくに流水の弱いところではその成長が著しい。

当該種の消長 1995 年、豊橋市の河川に定着したのが最初の確認とされる。その後関東から近畿まで太平洋沿岸に分布が拡大している。しかし、埼玉県では報告が多くない。2006 年、県内で発見され当初ヌマダイコンではないかと疑われたが、その後の精査で本種と確認された。現段階で分布は限定的であるといわざるを得ないが、調査が進めば県北部利根川沿い、元荒川沿い、大落古利根川沿いに広く分布している実態が明らかになると思われる。

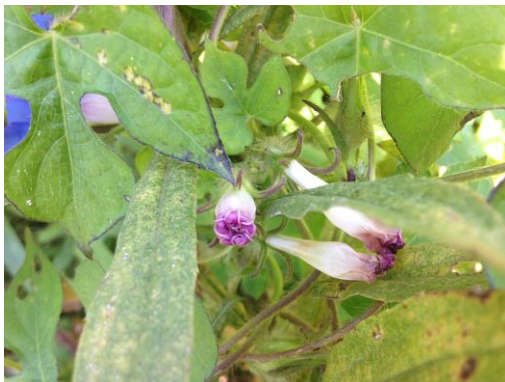
6 アメリカアサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea hederacea* 重点対策外来種



●はアメリカアサガオ確認地



分布状況 今回の調査では、丘陵帯南北以東の全域で確認された。埼玉県植物誌 1998 の記録によれば児玉郡一帯・行田・羽生・加須、及び川越・見沼区・緑区で記録がある。埼玉県植物誌 1998 発刊以後、秩父・熊谷・三郷が追加された。県レッドデータ 2011 の調査で入間・幸手・越谷・草加が記録された。総合すれば県全域に分布していることになる。



環境別報告件数 37 件の報告があった。河川敷と市街地でそれぞれ 35.1%の報告があり、次いで水田・休耕田・畑、雑木林となる。いろいろな環境で他物に絡み、這い上がっていると考えられる。

種の概要 日向を好み、絡みつくものをみな覆い隠してしまう。がく片は鋭尖頭で 1 本の花柄に花が 1-3 個つくことはアサガオと同じだが、がく片の先端が半曲するところが本種の特徴となる。葉の形はアサガオにくらべると切れ込みが強い。競合などの生態系被害による影響が大きく、分布の拡大や拡散の可能性が高いといわれているが、本県ではいまのところその兆候は感じられない。調査の実態が明らかになるにつれて適切な評価ができるようになるだろう。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	5.4
河川敷	B	13	35.1
水田・休耕田・畑	C	9	24.3
市街地	D	13	35.1
合計		37	99.9

当該種の消長 日本への導入は観賞用として江戸時代に持ち込まれたとある。戦後、輸入食料品に混じって侵入したともいう。現在は全国的に分布しているが埼玉への定着

ははっきりしない。1998 年時点で件数は少ないが県内に広く分布していたようである。今回の調査結果が実態なら減少しているという表現も可能になる。

7 オオアワダチソウ(キク科) *Solidago gigantea* subsp. *serotina* 重点対策外来種



●はオオアワダチソウ確認地



分布状況 今回の調査では、報告件数が少なく上尾で2件が確認されただけであった。埼玉県植物誌1998によれば県西部にはやや少ないもののほぼ県全域に分布している。県レッドデータブック2011の調査で鷺宮・川越・上尾・中央区・桜区・八潮で観察された。

環境別報告件数 報告件数が2件と少なく、環境別の傾向を述べることはできないが、河川敷と水田・休耕田・畑の報告があるが、雑木林、市街地では確認されていない。データをもう少し多く集める必要がある。

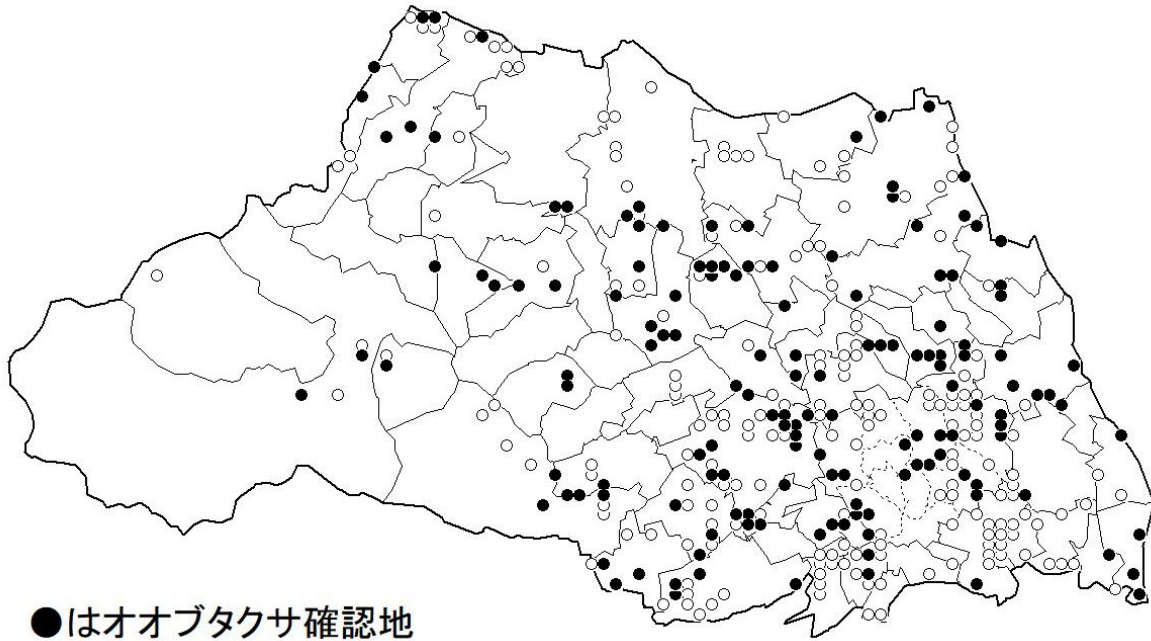
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	50
水田・休耕田・畑	C	1	50
市街地	D	0	0
合計		2	100

種の概要 茎や葉の形状や花の様子がセイタカアワダチソウに酷似する。しかし本種の花期は7-9月であり、セイタカアワダチソウの10-11月開花と比べると開花期が重なることはないで見まちがうことはない。狂い咲きの

の可能性を心配するなら、本種は茎の毛がほとんどないこと、舌状花の雌しべがごく短いことを確認すれば本種であることが確定できる。しかし実際は、オオアワダチソウをセイタカアワダチソウと誤解している場合が多々考えられ、オオアワダチソウのデータがセイタカアワダチソウの中に混じり込んでいる可能性がある。生物多様性の保全上重要な地域で問題になる可能性が高いというが、本県にそのような地域はないと見る。また、生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性が高いとも言われるが、本県では該当しないように思われる。

当該種の消長 もともとは明治時代に観賞用として持ち込まれたものである。その後、全国的に野生化したと考えられる。本県では1998年以前において県内に広く分布していたが、今回の調査ではごくわずかな報告しかなかった。調査年ごとに分布が狭まっている。このことから本種は減少しているとみるのが妥当なのであろうか。今後の報告を待ちたい。

8 オオブタクサ(キク科) *Ambrosia trifida* 重点対策外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ全県分布であるが、秩父地域の観察点がもう少し多いと全県分布がより鮮明になるのではないかと思う。埼玉県植物誌 1998 によればほぼ県全域に分布していた。県レッドデータブック 2011 の調査もそれを裏付けるものであった。

環境別報告件数 報告件数は 185 件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷 40%である。次いで水田・休耕田・畑 38.4%、雑木林、市街地でもそれぞれ 10%はある。環境を選ばないで広範囲に分布している。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	21	11.4
河川敷	B	74	40
水田・休耕田・畑	C	71	38.4
市街地	D	19	10.3
合計		185	100.1

種の概要 幼植物は 4 月に確認されている。5 月には急激に成長し始め 8 月まで成長を続ける。つぼみは 8-9 月、開花は 8-9 月、結実は 9-10 月となる。つぼみと開花と結実の時期は同時進行で重なりが強い。近縁種にブタクサがある。

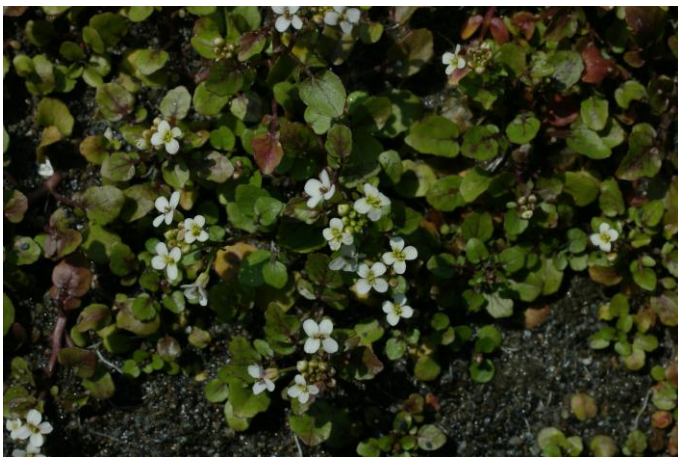
開花時期の花の様子はよく似ている。しかし葉の形が全くちがうので見まちがうことはない。ただし本種の葉の裂け方は一定でなく、裂けない葉もあり、3 裂・7 裂の葉もあり多様である。一枚の葉に注目せず植物体全体から葉の特徴を把握する必要がある。生態系に被害をもたらす可能性が高いとされ、特に絶滅危惧種の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いとされる。

当該種の消長 「日本帰化植物図鑑」によれば、本種は関東地方において 1953 年に見つかったのが最初である。本県においては、1998 年以前から徐々に分布の拡大を続けてきたが、最近の増減に対する評価は、「変わらず」とする調査員が多い。とりあえずは安定・定着段階に達したとみることもできる。本種はブタクサの侵入よりも後発で広まったと記憶するが、すでにブタクサを凌駕している。ブタクサはときどき見かける程度である。オオブタクサの優占した場所は明らかに在来種の分布域を狭めており、何らかの人為による駆除等の対策を考える時期に来ている。

9 オランダガラシ(アブラナ科) *Nasturtium officinale* 重点対策外来種



●はオランダガラシ確認地



分布状況 今年度の調査では丘陵北、丘陵南、秩父域から報告があった。平地・台地からの報告はあまりない。埼玉県植物誌 1998 によれば荒川水系に広く分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においても荒川水系に分布が広がっている。

環境別報告件数 30 件の報告があった。河川敷の報告が圧倒的に多く 50%を占め、水田・休耕田・畑が 33.3%と続く。本種は水辺環境を必要とし、水辺があればどこにでも生育し

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	13.3
河川敷	B	15	50
水田・休耕田・畑	C	10	33.3
市街地	D	1	3.3
合計		30	99.9

ている。

種の概要 流水の縁に群生し、茎の下部は横に這い盛んに分岐する。春から夏、白の十字形花がつく。他のアブラナ科の植物にくらべて、果実に 2 稜があり、熟してもはじけない。茎や葉に毛がない。年間を通して成葉はいつでも見

られる。開花は 4-9 月、結実は 5-11 月となる。季節感の乏しい植物といえる。生態系の被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えているというが、その実態がはっきりしない。さらに調査を進める必要がある。外来種問題として課題を挙げるなら繁茂して水流を抑制する点があり、浮遊物質を早く沈殿させ河床を浅くする影響をもたらすことは十分にあり得る。

当該種の消長 明治時代、西洋料理の添え物として導入されたものが全国各地に広がった。水辺の環境があればどこにでも生育する。富栄養化した水質にも強い。渓谷といえども生育する。食用にする場合はクレソンという名で流通するが、現在野生状態の本種を採取して食料とする習慣はほとんどなくなっている。調査が進めば県全域に分布している実態が浮かんでくるのではないかと推測する。2008-2013 年にモニタリング調査を実施した際、増減について、調査員の感触は「変わらず」が 76%で、「やや増加」が 14%、「やや減少」が 9%であった。ほぼ定着しているとみてよいだろう。

10 キショウブ(アヤメ科) *Iris pseudacorus* 重点対策外来種



●はキショウブ確認地



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、低山西の報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、山地帯・亜高山帯を除き県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査では上記植物誌の分布を補完するものであった。今後も調査を続け、全県の分布状況を確認していきたい。

環境別報告件数 37 件の報告があった。河川敷が最も多く 37.8%であった。次いで水田・休耕田・畑 32.4%、市街地 18.9%と続く。本種の生育には水辺を必要とし、雑木林は水辺と隣接するところに自生する。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	10.8
河川敷	B	14	37.8
水田・休耕田・畑	C	12	32.4
市街地	D	7	18.9
合計		37	99.9

種の概要 花はアヤメに似て鮮やかな黄色。水辺に群生。

開花期に花被片が黄色であれば迷うことなくキショウブといえる。成長期や結実期は葉で区別しなければならぬ。しかし他のアヤメ類と区別は困難である。強いていえばキショウブの葉の中脈は太くて目立つ。これに対してカキツバタやアヤメの中脈は細くて目立たない。成葉はいつでもあり、5月にはつぼみができ、開花は5月と6月となる。開花期間はあまり長くない。6月からは結実し果実は9月までついている。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本県ではまだ該当例を聞いていない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも聞くが、この該当例も今のところ聞いていない。

当該種の消長 明治末に花卉として導入された。ハナショウブ類は青～ピンク系統であったので黄色のキショウブは高く評価されたい。やがて栽培株が逸出し野生化するようになった。本県では1998年すでに全県的分布であった。増減について調査員の感触は「変わらず」が最も多く7割弱を占める。全体としては変動なしである。侵略的傾向はほとんど認められない。県内では安定的に定着していると考えてよい。



●はコマツヨイグサ確認地



分布状況 今回の調査ではほぼ県全域に分布することが明らかになった。埼玉県植物誌 1998 によれば、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南に分布、ただし比企郡には記録がない。県レッドデータブック 2011 の調査では県南部の全域に生育を確認した。

環境別報告件数 報告件数は 140 件であった。環境別に市街地 43.6%、水田・休耕田・畑 31.4

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	1.4
河川敷	B	33	23.6
水田・休耕田・畑	C	44	31.4
市街地	D	61	43.6
合計		140	100

%、河川敷 23.6%、雑木林の順になる。あまり環境を選ばずどこにでも出現する。

種の概要 日当たりのよい道ばたのような環境に這うように広がる。多少斜上する場合もあるが直立することはない。近縁種メマツヨイグサ(アレチマツヨイグサ)の茎は直立する。

本種の葉の縁は羽状に浅く切れ込み波打つ。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本種に関してこの事実合う事例は聞いていない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも聞かすが、本県の絶滅危惧種は一般にやや半日陰の環境に分布することが多く、本種のようにきわめて日当たりのよいところに生育する種とは分布が重ならないように思われる。したがって、この該当例も今のところ聞いていない。コマツヨイグサが鳥取砂丘を狭めようとする動きが外来種問題として取り上げられているようだが本県にそのような事例はない。

当該種の消長 1910 年代(明治末期)に侵入したといわれている。本県では 1998 年において平地や台地に多く分布し、丘陵帯や山地帯ではあまり見られない状況だった。この状況は現在も維持されているのではないかとと思われる。しかし山間部も調査し、実態を正しく把握しておく必要がある。

12 シナダレスズメガヤ(イネ科) *Eragrostis curvula* 重点対策外来種



●はシナダレスズメガヤ確認地



分布情報 今回の調査では、上里町・本庄・深谷・熊谷・行田・羽生など、県の北部一帯での報告が多くあった。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父地域・県北部・県東部に記録があり、自動車道に砂防用として植栽したものが逸出したものである。県レッドデータブック 2011 の調査による分布は、埼玉県植物誌 1998 の分布と重なる。



環境別報告件数 今回の報告件数は 40 件であった。

環境別に水田・休耕地・畑が 47.5%と最も多く、次いで市街地 27.5%、河川敷 20%、雑木林の順となる。日当たりの良い開けた場所であれば、あまり環境を選ばないものと思われる。

種の概要 茎は高さ 60–120 cm。茎は密に束生、叢生して大きな株を作る。葉幅 2 mmの葉が根本から多数出て、先端が地面に届くほどしなだれているのが特徴。葉鞘の口部に長毛がある。枝の分岐点は膨れて白毛がある。夏、茎の先に長さ 20～40 cmの円錐状の花序を出す。花序は先が傾き、小花はやや紫色を帯びる。生活段階としては、5–11 月の長きにわたり、つぼみ、開花、結実が確認される。

シナダレスズメガヤ

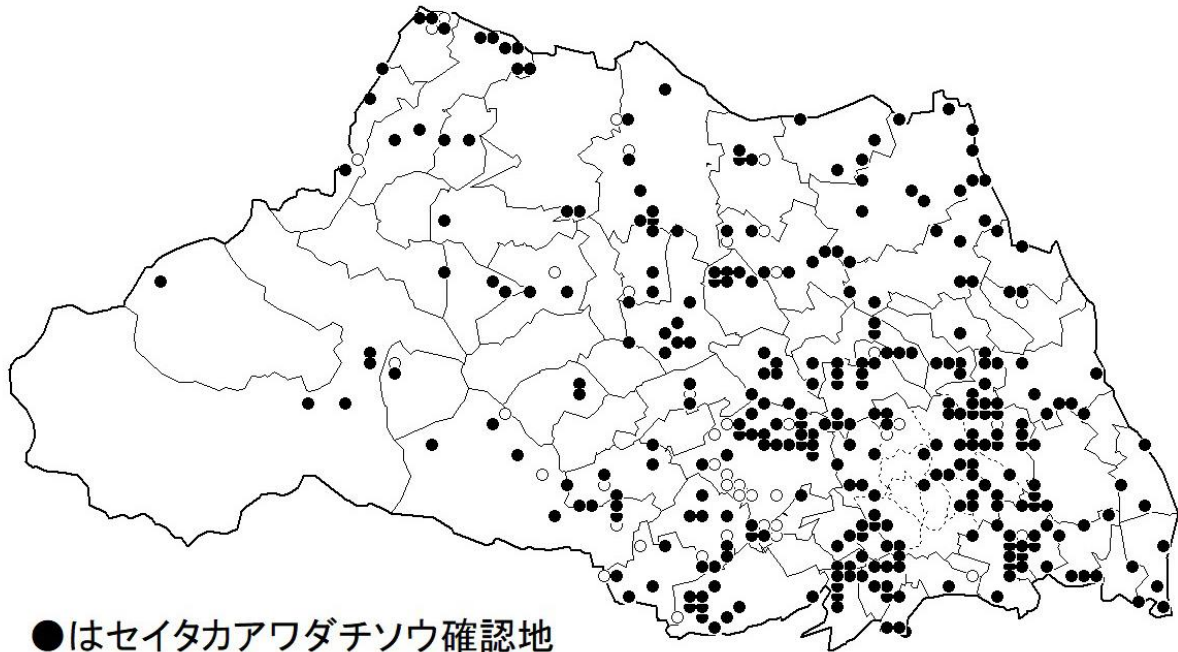
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	5
河川敷	B	8	20
水田・休耕地・畑	C	19	47.5
市街地	D	11	27.5
合計		40	100

結実が確認される。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされているが、絶滅危惧種との競合は現在のところ聞いていない。しかし、近年至る所で目立つ傾向があり、他種との競合は避けられないものと思われる。例えばススキやセイバンモロコシとの競合はあり得る。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、第二次世界大戦前、砂防用に導入し、その後、全国に分布した。埼玉県では県内全域の自動車道に植栽された経緯があるため、県内全域に分布している。今回の調査では今まで記録の少なかった県西部の報告が加わった。県南部や県東部にも分布があるのではないと思われるが不明である。種子生産量がきわめて多く、雨や風によっても伝播されるため、今後ますます広がっていく可能性が高い。さらに精査する必要がある。

13 セイタカアワダチソウ(キク科) *Solidago altissima* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、亜高山帯を除く県全域で分布の確認ができた。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父市大滝を除き、県内全域にまんべんなく分布している。県レッドデータブック 2011 の調査でも同様の分布が確認され定着とみなされている。

環境別報告件数 450 件の報告があった。市街地での報告が 32.2%、水田・休耕田・畑 31.6%、河川敷 25.6%と雑木林以外の環境での数値は互いに拮抗している。あまり環境を選ばない感があるが、日照は必要のようであった場所があればどこでも見られる。

種の概要 秋、茎の先に大きな円錐花序が開く。類似種にオオアワダチソウがある。しかしオオアワダチソウはあまり見かけない。本種は葉や茎に堅い毛を密生するが、オオアワダチソウの茎はほとん

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	48	10.7
河川敷	B	115	25.6
水田・休耕田・畑	C	142	31.6
市街地	D	145	32.2
合計		450	100.1

んど無毛で表面はなめらかである。本種の花期は晩秋。オオアワダチソウの花期は一足早く 7-9 月となる。

生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされる。本県でも蔓延し定着・安定の状態にあり、在来種の生育範囲を明らかに奪った。また絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされるが、その可能性は確かである。しかし、現在どのような絶滅危惧種と競合しているのか、またはどのような絶滅危惧種を消滅に追いやっているのか、その具体的な事例が不明のままである。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治年間に導入、第二次世界大戦後に温暖地を中心に広く分布を広げた。本県でも、1998 年、2011 年、そして今回 2016・2017 年の進行中の調査からいえることは、分布は県全域に広がっており、もはや普通に見られる種として定着している。かつてのような旺盛な分布の拡大はみられないが、引き続きその動向を見定めていく必要がある。今のところ減少傾向は認められない。

14 セイヨウタンポポ(キク科) *Taraxacum officinale* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では、県内全域で分布が確認できた。分布図上の観察地点が均一分布をしていないが、これは調査地点のばらつきが反映している。調査地点の設定について検討が必要である。埼玉県植物誌 1998 によれば、県内全域にくまなく分布する。山地帯、亜高山帯も例外ではない。県レッドデータブック 2011 の調査でもほぼ同じ分布を確認している。

環境別報告件数 259 件の報告があった。生育地は市街地が多く報告の 38.2%を占める。次いで水田・休耕田・畑 29%、河川敷 22.8%となる。雑木林以外の環境では、その数値は拮抗しており、環境を選ばない種といえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	26	10
河川敷	B	59	22.8
水田・休耕田・畑	C	75	29
市街地	D	99	38.2
合計		259	100

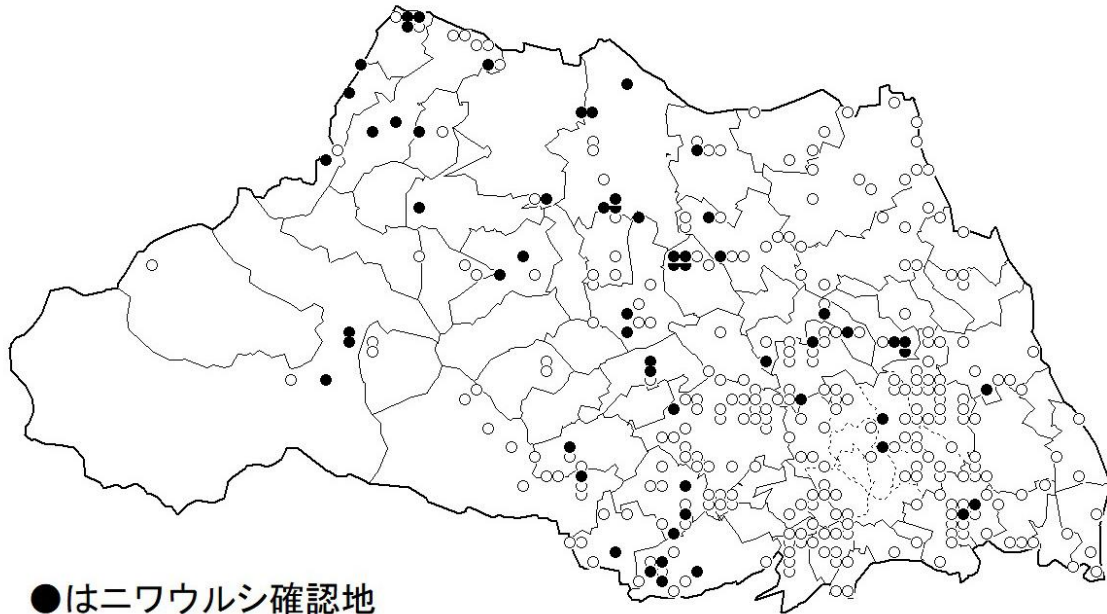
種の概要 草丈は通年を通して 5-30 cmで、春夏秋冬あまり変わりはない。土壌によっては相当高くなることもある。本種は総苞外片が反り返るのを大きな特徴とする。在来種

カントウタンポポの総苞外片は反り返らない。両者の交雑種をアイノコセイヨウタンポポというが、この総苞外片は開出するが反り返らない。

本種は生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされるが、本県では全域分布の状態が長期間続いており被害の実態は不明のままである。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとも言われるが、その実態も不明のままである。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治の初め北海道に導入された。本県でも 1998 年、そして 2011 年において県内全域分布である。今回の調査は進行中ではあるが同様の結果になると予想されている。カントウタンポポは減少傾向にあるが、この現象はセイヨウタンポポの分布が拡大したことと連動しているのかどうかは即断できない。ただし最近、カントウタンポポとセイヨウタンポポの交雑種が増え、セイヨウタンポポを凌駕している可能性がある。その結果セイヨウタンポポが減少しているのではないかと懸念されるが、それを立証するデータがない。外来性のタンポポについてはさらにデータを集め精査する必要がある。

15 ニワウルシ(ニガキ科) *Ailanthus altima* 重点対策外来種



●はニワウルシ確認地



分布情報 今回の調査では、亜高山、山地帯以外の地域で分布が確認されているが、県南部の都県境沿いはごくわずかの報告しかない。埼玉県植物誌 1998 によれば、ほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査でもほぼ県内全域に分布している。県内には完全に定着しているといえる。

環境別報告件数 今回の報告件数は 70 件であった。生育地は水田・休耕地・畑が最も多く、報告の 34.3% を占める。次いで市街地 31.4%、雑木林、河川敷が同じ割合で並ぶ。全般的には環境を選ばないで生育する樹木であるといえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	12	17.1
河川敷	B	12	17.1
水田・休耕地・畑	C	24	34.3
市街地	D	22	31.4
合計		70	99.9

種の概要 高さ 10~20m。葉はウルシに似た大形の奇数羽状複葉で互生する。小葉は 6~12 対あり、長卵形~披針形で先が細くとがり、基部にある鋸歯の縁には腺点がある。

6 月頃枝先に緑白色の小花を多数つける。果実は翼果。中央に扁平な種があり褐色に熟す。風によって散布される。本種の名はウルシの葉に似ていることに由来するもので、かぶれるものではない。別名シンジュともいう。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いという。本種は河川敷に多く生育することから絶滅危惧種等との競合はあり得る。しかし、その具体例を聞いていないので予測の範囲を出ることはできない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治 10 年ころ渡来し、庭木街路樹として栽培された。本県では第二次世界大戦中、天蚕(ヤママユガの幼虫)のえさとして県内に広まった。河川敷、空き地などにパイオニア樹種として侵入する。種子の発芽率も良い。また、萌芽更新率も高く、成長も速いため分布を広げているようだ。県内全域分布ではあるが、県内隅々までさらに拡大を続けているのではないかとと思われる。さらに精度の高い調査を行ってデータを蓄積し、その実態を明らかにする必要がある。



●はノハカタカラクサ確認地



分布情報 今回の調査では県南部・県東部を中心に加須・本庄市の報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、熊谷・北本・緑区の 3 地点ほどの記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では、今回の調査とほぼ重なり県南部・県東部の分布が確認されている。

環境別報告件数 今回の報告件数は 32 件であった。生育地は市街地が最も多く、報告の 53.1% を占める。河川敷、雑木林が続き、水田・休耕田・畑の順である。もともと園芸品種が逸出して野生化したものなので、市街地に多く見られるのは納得できる。全体としてみれば環境を選ばない種といえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	15.6
河川敷	B	7	21.9
水田・休耕田・畑	C	3	9.4
市街地	D	17	53.1
合計		32	100

種の概要 茎は良く分岐して地を這い、節から根を出して広がり、長さ 1 m 以上になる。葉は先が尖った卵形で基部は葉鞘となる。夏、茎の頂に直径 1 cm 程の白い 3 弁の花を数個ずつつける。3 枚の花弁は同形同大である。別名はトキワツユクサというが、これは葉が常緑であることに由来する。

絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いといわれるが、本県では今現在被害の事例を聞いていない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、昭和年間の初期に葉に白斑の入った園芸品種が観賞用に導入され温暖地で逸出した。本県では埼玉県植物誌 1998 ではわずかな記録しかなく、その後、県レッドデータブック 2011 の調査で県南部・県東部に広がりを見せていることが確認された。そして今回の報告は、これらの分布記録とほぼ重なる結果になってきており定着した状況を感じ取ることができる。県北部や県西部はどうか、実際のところははっきりしない。引き続き調査を続行してデータを取得し、その実態を把握する必要がある。

17 ヒメマツバボタン(スベリヒユ科) *Portulaca pilosa* 重点対策外来種



分布情報 今回の調査では久喜・北区・朝霞・新座・所沢・日高で確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば、件数は多くないが、秩父地域・県北部・県南部を中心に分布が記録されている。県レッドデータブック 2011 の調査では埼玉県植物誌 1998 とほぼ重なる分布が確認された。

環境別報告件数 今回 8 件が報告された。生育地は市街地がほとんどで 87.5% を占める。河川敷が 1 件であった。雑木林や水田・休耕田・畑という環境での報告は無い。湿った環境よりは、乾燥した日当たりの良い場所を好む植物であることがわかる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	1	12.5
水田・休耕田・畑	C	0	0
市街地	D	7	87.5
合計		8	100

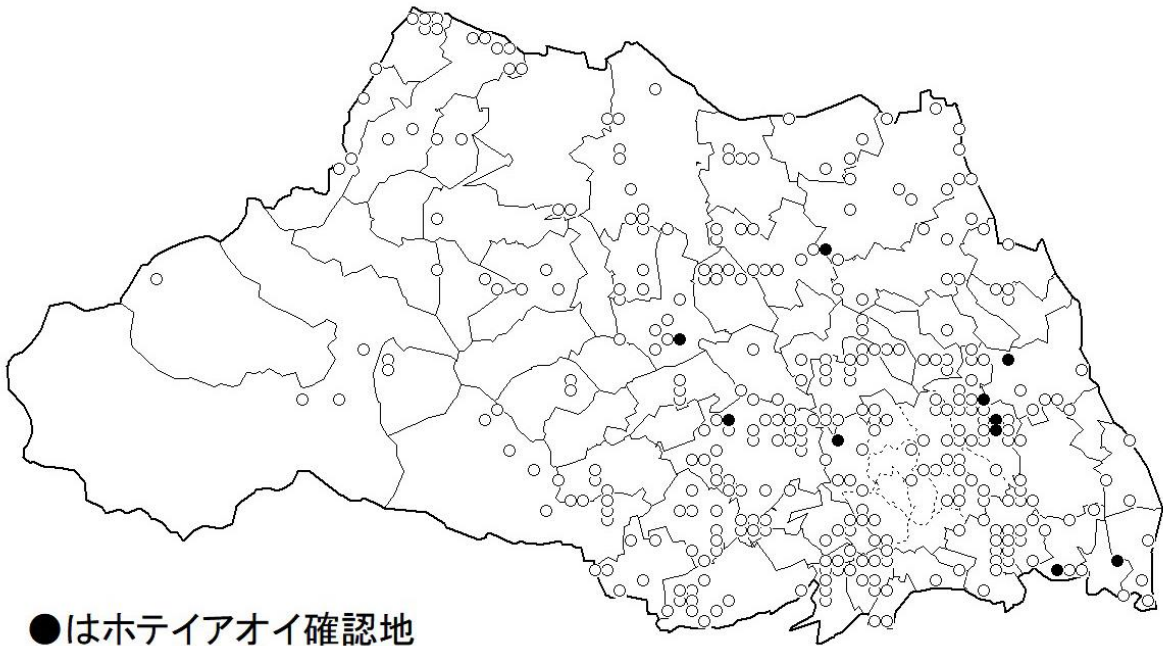
種の概要 全体多肉質。茎は基部からよく分岐して地を這い、または斜上して長さ 30 cm 程になる。葉は扁平な棒状でやや先が尖り、ほぼ無柄で互生する。葉の基部に、白い縮れた長毛が目立つ。夏、茎の先にマツバボタンに似た 5 弁の花を数個ずつつける。花は直径 1 cm と、マツバボタンに比べてはるかに小さい。

の花を数個ずつつける。花は直径 1 cm と、マツバボタンに比べてはるかに小さい。

生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いといわれているが、本県では定着している事例はほとんどなく、むしろややまれな外来植物としての位置づけが妥当である。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いともいわれているが、ヒメマツバボタンと競合する絶滅危惧種の例を聞かない。本種は市街地に出現しており、逆に絶滅危惧種は市街地で生育する例はほとんどない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1960 年代に帰化が知られるようになり、現在では関東地方以西で乾燥した日当たりのよい道端などに発生する。本種は熱帯アメリカ原産であり、その多肉質で棒状の細長い葉をもつという形態を見ても、葉からの蒸散を極力抑えた構造になっており、高温や乾燥に強いことは想像できる。本県の場合、過去のデータを含めても確認数はわずかであり、出現も不安定のところが感じられ、定着していないと考えられる。

18 ホテイアオイ(ミズアオイ科) *Eichhornia crassipes* 重点対策外来種



●はホテイアオイ確認地



分布情報 今回の調査では、加須・春日部・岩槻・西区・草加・八潮・東松山・川越の報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、本庄・行田・羽生・加須・久喜・杉戸・坂戸での記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査によれば、行田・羽生・川越・上尾・岩槻・越谷で確認されている。

環境別報告件数 今回の報告件数は 10 件であった。河川敷での優占度は高く池沼を伴う河川敷に多い。次いで市街地、水田・休耕田・畑となる。本種は水辺環境を必要とし、水辺があればどこでも生育する。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	7	70
水田・休耕田・畑	C	1	10
市街地	D	2	20
合計		10	100

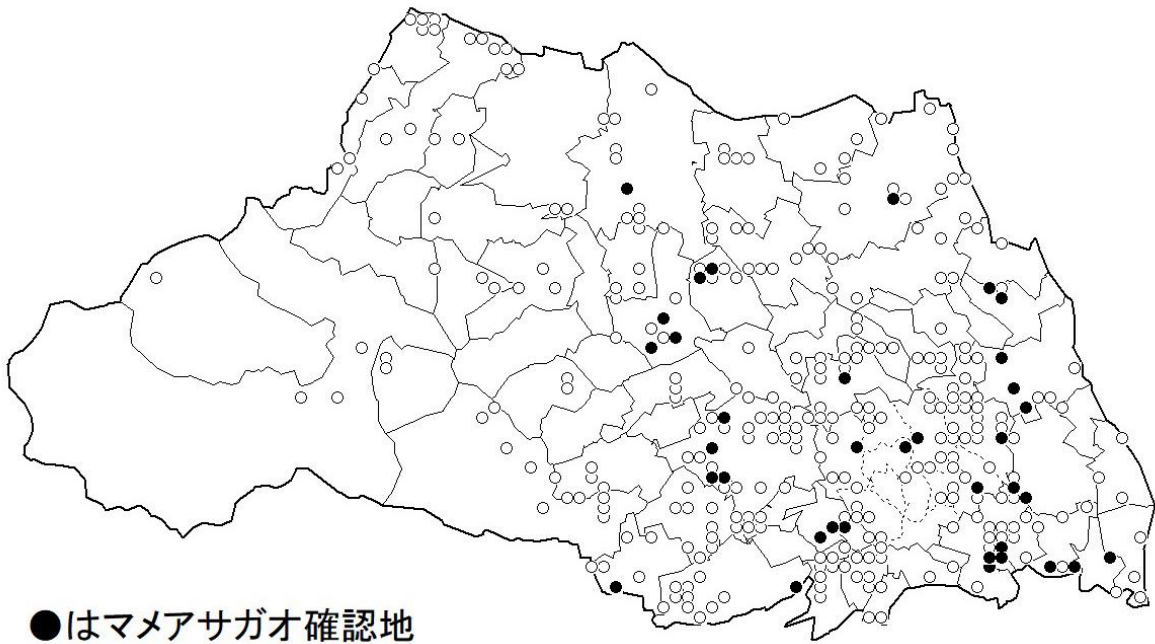
種の概要 多年生の浮遊植物。茎は水中にあり葉を叢生する。葉は長さ 5~15 cm の広い倒卵形で、厚く光沢があり葉柄の基部は丸く膨らみ浮袋の役目をする。この膨らんだ部分を布袋の腹に見立ててこの名がついたという。花期は 8~10 月。高さ 15 cm 程の花茎に淡紫色の花を多数つける。

花穂は 1 日で全て開花し、次の日には茎ごと水没する。根もとからつる枝を出し次々と子株を作り、短期間に大株を形成する。

生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入・定着して被害をもたらす可能性が高いというが、本県ではそのような事例は聞かない。また、絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いというが、現時点で絶滅危惧種等との競合の例を聞かない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治中期に観賞用に渡来し、今は南関東、北陸以西にみられ、観賞用として栽培もされるが、暖地では水路の害草として嫌われる。異常繁殖が問題になったのは 1960 年以降。本県では低地の池沼に分布が確認されているが、多く分布しているというほどではない。十分な調査データはないが、水質浄化の作用もあり、緑肥として利用している地域もあるので、現在も拡大を続けているものと考えられる。さらに調査を続行する必要がある。

19 マメアサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea lacunosa* 重点対策外来種



●はマメアサガオ確認地



分布情報 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地・丘陵南で確認された。県東部に多く見られる。埼玉県植物誌1998によれば、亜高山、山地帯以外のほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ県全域での確認がある。

環境別報告件数 今回の報告件数は41件であった。生育地は河川敷が43.9%、次いで水田・休耕田・畑、市街地、雑木林の順である。

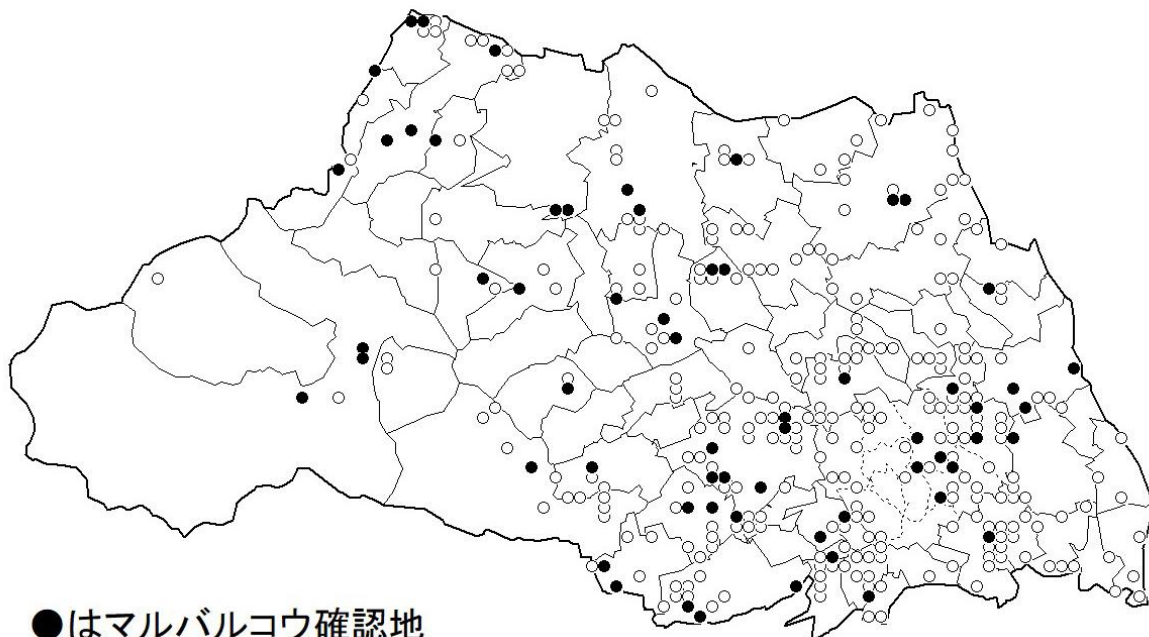
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	18	43.9
水田・休耕田・畑	C	14	34.1
市街地	D	9	22
合計		41	100

種の概要 茎はつる性で他物に巻きつき長さ数mになる。葉は先の尖った長卵形から心臓形で全縁または3裂し、長い葉柄があつて互生する。夏から秋、葉腋に1~2本の花茎を出し、直径1.5cm程の淡紫色から白色のローソク形の花を1~2個つける。花柄にはイボ状の突起が密生し、稜がある。本種に似たホシアサガオは花が数個まとまってつき、花柄のいぼ状突起はまばらである。

絶滅危惧種等との競合が懸念されているというが、本県の場合そのような報告は聞かない。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1955年に東京近郊での帰化が報告され、現在では東北地方以南で、道端などにやや普通に見られるとある。今回、報告件数自体は少ないが、近年水田・休耕田・畑や道端で、目にする機会が増えている。しかし、分布が拡大している兆候は感じられない。ともかく調査不足は否めない。さらに調査を続行し、県内データを取得し、その実態を把握する必要がある。

20 マルバルコウ(ヒルガオ科) *Ipomoea coccinea* 重点対策外来種



●はマルバルコウ確認地



分布情報 今回の調査では、ほぼ県内全域で分布が確認できた。埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父線沿いと県西部に記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では亜高山帯・山地帯を除きほぼ県内全域で確認され、今回の調査と分布が重なっている。

環境別報告件数 今回は 68 件の報告があった。生育地は水田・休耕田・畑が多く、報告の 45.6% を占める。次いで市街地、河川敷、雑木林の順になる。雑木林での確認は少ない。

種の概要 つる性 1 年草で他物に絡みつき数 m も這い登る。葉はハート形で互生する。春から夏にかけて、朱紅色で五角形ロート状の小さな花が咲く。まぎらわしい種はないが葉だけのときは迷う。葉はいわゆるサツマイモの葉と同じ形となり、全体卵形で基部は心形となる。葉には長い葉柄がある。近縁種では栽培品のルコウソウがあるが、この葉は羽状全裂であって葉柄がないので全く違うものとして目に映る。

絶滅危惧種等との競合の事例は聞いていない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	5.9
河川敷	B	12	17.6
水田・休耕田・畑	C	31	45.6
市街地	D	21	30.9
合計		68	100

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1850 年前後に花卉として渡来したが、暖地を中心に野生化した。現在では北陸、北関東以南に分布している。本県ではほぼ全域に分布していると考えられるが、今回の調査結果ではデータ数が少なく全域分布の様子はうかがえない。根拠となる調査データが不足しているが、道端や畑地で目にする機会は増えている。さらに調査を続行し、その実態を正確に把握する必要がある。

21 メリケンガヤツリ(カヤツリグサ科) *Cyperus eragrostis* 重点対策外来種



●はメリケンガヤツリ確認地



分布情報 今回の調査では、加須・吉川・朝霞・桜区・川越等で確認された。埼玉県植物誌 1998 に、この種の掲載はない。県レッドデータブック 2011 の調査では羽生・菖蒲・松伏・上尾・坂戸・狭山・飯能・所沢で確認されている。

環境別報告件数 今回 14 件の報告があった。生育地は河川敷が多く、報告の 64.3% を占める。次いで市街地、水田・休耕田・畑の順となる。雑木林の報告は無かった。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0
河川敷	B	9	64.3
水田・休耕田・畑	C	5	35.7
市街地	D	0	0
合計		14	100

種の概要 茎は束生し 3 稜形で太くて丈夫。高さ 30~100 cm。葉は茎とほぼ同長、幅 4~8 mm、縁はざらつき、基部は鞘となり茎を包む。茎の基部につく 2~3 個の葉は葉身を欠き紫色を帯びる。総苞片は茎の先に 4~7 個が付き、葉状で花序より著しく長いものもある。花序の枝は数個~10 個以上で 1~10 cm、頂部に多数の小穂が球形に密生する。小穂は線形、扁平で淡黄緑色、20 花ほどを 2 列につける。鱗片は広卵形。果実はそう果、倒卵形で 3 稜あり、長さ 1 mm でほぼ平滑。絶滅危惧種等の生育に甚大な被害を及ぼす可能性は高いといわれるが、今のところ絶滅危惧種との競合については不明である。

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1950 年代の渡来といわれる。侵入生物データベースでは 1959 年の三重県、神奈川で 1980 年代に確認、1990 年代後半に分布拡大とある。十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。本県では 1998 年代ではほとんど確認されなかった。その後、県レッドデータブック 2011 では県南部・県西部に広がりを見せた。県北・秩父地域での記録はないが、急速に拡大している外来植物の一つである。今回の調査結果は県レッドデータブック 2011 と重なりがみられないことからデータ不足の感が否めない。さらに調査を続行し、精度の高い県内データを取得する必要がある。

22 アメリカオニアザミ(キク科) *Cirsium vulgare* その他の総合対策外来種



●はアメリカオニアザミ確認地



分布状況 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南で確認されている。丘陵地以東の分布が目立つ。埼玉県植物誌 1998 によれば、行田、春日部、越谷、浦和、草加、八潮、三郷で確認されている。県レッドデータブック 2011 の調査においても、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南に分布となっているが、秩父でも確認されている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	11	6.7
河川敷	B	24	14.6
水田・休耕田・畑	C	34	20.7
市街地	D	95	57.9
合計		164	99.9

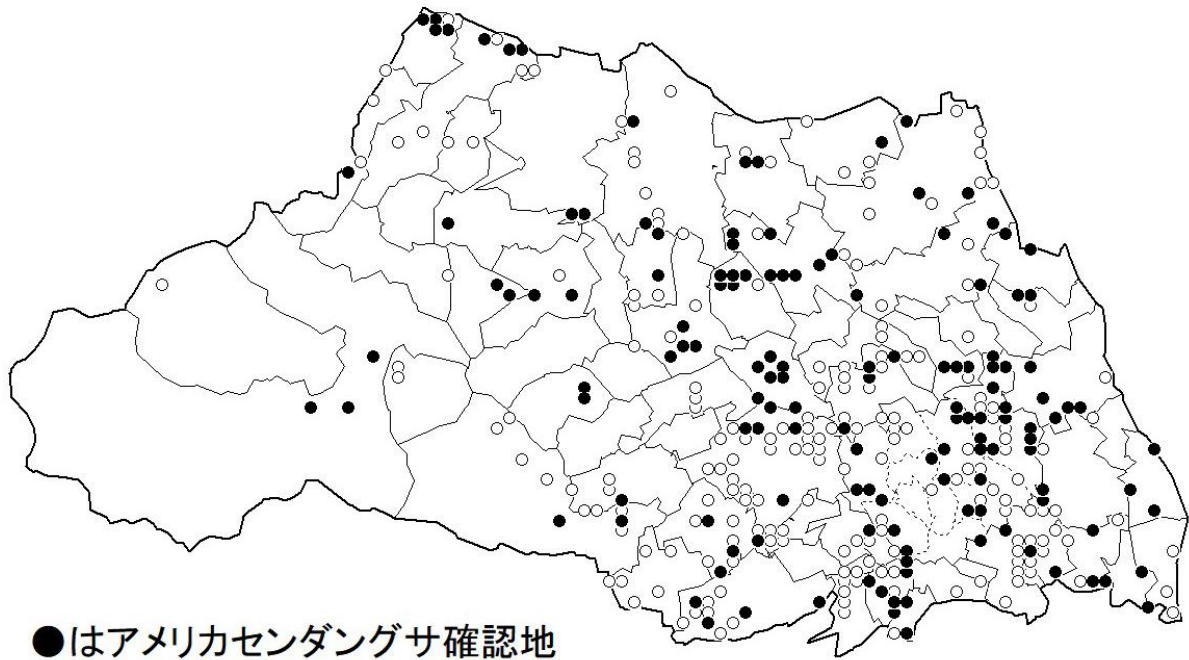
環境別報告件数 164 件の報告があった。生育地は市街地が多く全体の 57.9% を占め、水田・休耕田・畑が 20.7%、河川敷、雑木林の順となる。

種の概要 茎には鋭い棘のある翼がある。花は赤紫色で枝先に 2, 3 個付く。総苞片は線形で先は鋭い刺になる。葉も

羽状に大きく切れ込み裂片の先は鋭く刺がめだち、全草が刺におおわれている印象である。ヨーロッパ原産であることから、別名セイヨウオニアザミと呼ばれる。自然性の高い環境や牧草地に侵入するため、在来種や牧草と競合、駆逐の恐れがあるという。実際に、畑作物、牧草と競合し減収をもたらすとともに、鋭い刺が家畜を傷つけることが問題となり、農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼしている。

当該種の消長 1960 年代北海道で確認された。埼玉県内で立証する十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。当該種は環境への適応性が高く、種子生産力と分散能力に優れているという。また、鋭い刺を持つため、抜き取りなどの駆除が難しいこともあり、分布を広げているようである。さらに調査を続行し、精度の高いデータを取得し、その実態をもとに駆除等の具体的方策を検討する必要がある。

23 アメリカセンダングサ(キク科) *Bidens frondosa* その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では垂高山、山地帯以外の県内全域で確認されている。埼玉県植物誌 1998 では飯能西と本庄市を除いて全県域の分布が確認されているが、県レッドデータブック 2011 の調査においても、県内全域の分布が確認され、県内定着とみなされている。

環境別報告件数 今回の調査では 171 件の報告があった。水田・休耕田・畑 43.3%、次いで河川敷と市街地の値は拮抗している。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	14	8.2
河川敷	B	43	25.1
水田・休耕田・畑	C	74	43.3
市街地	D	40	23.4
合計		171	100

る。本種は湿りけのある開けた環境を好むようだが、さまざまな環境に適応し定着しているようだ。

種の概要 茎は切り口が4角で紫褐色を帯びる。葉は対生、上方で時に互生。3~8小葉にわかれる。葉の先は細くとがり細かい鋸歯がある。頭花は黄色で舌状花は小さく外からは見えない。総苞外片は葉のように大きい。種子は扁平でかぎ状の棘が2本ある。生活段階としては、成葉の状態は2-11月にみられる。つぼみ5-11月、開花9-11月、結実10-12月で、時期が重なり同時進行の形となる。

河川敷や水辺の在来植物への競合、駆逐の恐れがあり、代表的な水田雑草の一つであることから、要注意外来植物とされている。

河川敷や水辺の在来植物への競合、駆逐の恐れがあり、代表的な水田雑草の一つであることから、要注意外来植物とされている。

当該種の消長 日本には、大正時代に渡来し、1920年琵琶湖畔に群生していたという。既に全国各地で定着しているが、侵入経路等のいきさつは明らかでない。本来は水辺や湿地を好む植物だが、土壌の種類、乾湿などへの適応性が大きいので、全県的な広がりを見せたと考えられる。

24 アレチヌスピトハギ(マメ科) *Desmodium paniculatum* その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では加須・中川低地南東部、大宮台地、荒川西台地、丘陵北・丘陵南で確認があった。埼玉県植物誌 1998 では見られなかった越谷、三郷、八潮、川口、緑区にも分布が確認される。県レッドデータブック 2011 の調査においても、丘陵南では確認されていなかった。少しずつ分布を広げているようだ。調査の結果だけでは断言できないが、果実が人や動物に付き運ばれるため、今後さらに分布を拡大していく可能性がある。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	13	19.4
河川敷	B	18	26.9
水田・休耕田・畑	C	20	29.9
市街地	D	16	23.9
合計		67	100.1

環境別報告件数 67 件の報告があった。最も多い報告件数は水田・休耕田・畑で 29.9%である。次いで河川敷 26.9%、市街地 23.9%、雑木林と続く。値はいずれも拮抗していて、どんな環境にも適応するようだ。

種の概要 葉は3小葉からなり、小葉は長楕円形、下面は毛が多い。茎の先や葉腋に紅紫色の蝶形花を数個付ける。果実は扁平で4-6節にくびれ、鉤状に曲がった微毛を密生し衣類や動物によく付いて運ばれる。生活段階としては、幼植物は5-10月と長く見られ、成葉の状態は7-10月に見られる。つぼみ6-10月、開花9-11月、結実10-11月で、開花、結実は次々と同時進行で行われる。

当該種の消長 1965年に大阪で見いだされ、荒地、道端に広がる。関東以西に多いという。県内では1998年代に限定的な分布であったが、今回の調査でも分布の拡大は見られない。増減について調査員の感触によれば「変わらず」が圧倒的に多い。「やや減少」と「やや増加」の少数意見は拮抗している。環境に関する影響では、アレロパシー効果が懸念されているが、現在のところそのような報告は見られない。引き続き調査を行いデータの収集を図り、動向を見守りたい。

25 エゾノギシギシ(タデ科) *Rumex obtusifolius* その他の総合対策外来種



●はエゾノギシギシ確認地



分布状況 今回の調査では亜高山、山地帯以外のほぼ県内全域で分布が確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば行田、日高、秩父南を除く、ほぼ県全域に分布となっている。県レッドデータブック 2011 の調査でも、県内全域に定着したとみなされている。今回の調査では全県分布と断言できないが、今後調査を続けることにより確かめられるであろう。

環境別報告件数 今回の報告件数は 91 件であった。最も多いのが河川敷で 34.1%、水田・休耕田・畑 31.9%と値は拮抗している。次いで市街地、雑木林となる。日当たりの良い湿地を好む植物というが、環境を選ばず至るところで生育しているようだ。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	11	12.1
河川敷	B	31	34.1
水田・休耕田・畑	C	29	31.9
市街地	D	20	22
合計		91	100.1

耕田・畑 31.9%と値は拮抗している。次いで市街地、雑木林となる。日当たりの良い湿地を好む植物というが、環境を選ばず至るところで生育しているようだ。

種の概要 ギシギシに似るが、根生葉は長い柄があり、ギシギシより幅が広く縁は細かく波打つ。中央脈が赤みを帯びる。茎先に沢山の花を輪生し花穂になる。花穂はギシギシより細長く、全体に赤褐色に見える。果実の翼は卵形で縁に刺がある。生活段階について、幼植物から結実までのすべての段階が 5-10 月の間、同時進行で行われている。繁殖力が強く、亜高山などの自然度の高い環境や、希少種の生育環境にも侵入するため、在来植物や希少種の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされる。

当該種の消長 明治中期に渡来したと考えられる。1909 年に北海道で確認された。その後急激に分布を広げたといえる。本県では 1988 年時点で、低地から低山の少し湿った道端や荒地の日だまりに普通に見られるという記載がある。在来植物への競合を懸念して各地で刈り取りがおこなわれているようだが、根茎からの繁殖が旺盛で目立った効果は上がらないという。今後の調査でデータの集積を重ね、分布拡大の状況に注意を払いつつ、駆除対策などに反映していきたい。

26 オオオナモミ(キク科) *Xanthium occidentale* その他の総合対策外来種



●はオオオナモミ確認地



分布状況 今回の調査では加須・中川低地南東部、大宮台地、荒川西台地、丘陵南で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば、八高線以東の平地、丘陵地に普通に分布するとある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では都幾川、東秩父以外の全域で確認されている。

環境別報告件数 報告件数 48 件であった。報告の多かったのは河川敷 45.8%、次いで水田・休耕田・畑 43.8%と値は拮抗している。市街地と雑木林にも見られる。土壌条件よりも、開けた環境に多く生育している傾向がうかがえる。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	2.1
河川敷	B	22	45.8
水田・休耕田・畑	C	21	43.8
市街地	D	4	8.3
合計		48	100

種の概要 河川・池沼の端や。農耕作地に多く生育する。オナモミに似るが、茎は暗紫色を帯びるものが多い。葉には長い柄があり、心臓形で不規則に切れ込む。果実はオナモミより密につき、刺の長さも含めてオナモミよりも大きい。生活段階としては、幼植物は 5 月から見られるが、成

葉、開花が見られるのは 9-10 月。結実は 10-12 月に確認できる。

当該種の消長 1929 年、岡山県で確認された。農林水産業に係る被害として、世界的に見られる農耕地雑草の一つで、畑作物、牧草などに雑草害を及ぼす他、有毒成分を含むため、家畜の採食を妨げることが問題とされている。さらに調査を続行し、精度の高いデータの集積を図り、その実績をもとに駆除等の方策を検討する必要がある。



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北で分布が確認された。低山西、低山東にもある。埼玉県植物誌 1998 の記録によればその分布域は今回の調査と重なる。県レッドデータ 2011 の調査もほぼ同様の結果を得た。分布はほぼ定着しているといつてよい。

環境別報告件数 報告件数は 95 件であった。生育地は市街地 31.6%、水田・休耕田・畑 29.5

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	10	10.5
河川敷	B	27	28.4
水田・休耕田・畑	C	28	29.5
市街地	D	30	31.6
合計		95	100

%、河川敷 28.4%となり値は拮抗している。雑木林にも出現し、ほとんど環境を選ばず、どんなところにも出現している。

種の概要 イネ科の外来種としてよく目立つ存在である。環境別報告件数からは本種が環境は選ばないといえるが、

本来的には比較的湿潤地を好む植物であることが想定できる。本種の特徴は小穂に毛があり、その毛がやや長めであることからチクゴスズメノヒエやキシウスズメノヒエと区別することができる。また本種のふさは3-6本であることから、もっとふさの数が多いタチスズメノヒエと区別することができる。株立ちになっていることが多く直立する。ふさは小穂が2-3列規則正しく並び柱頭と葯が黒紫色であることを特徴とする。

当該種の消長 1915年に小笠原で気づかれたのが最初である。その後主に関東以南に分布を広げた。暖地性の外来種である。本県では1998年において亜高山帯、山地帯、低山西、低山東を除く全域に分布が確認されており、2011年においても分布に大きな変動はなく、今回の調査でもほぼ同様の分布を示しているところから安定状態に達していると思われる。



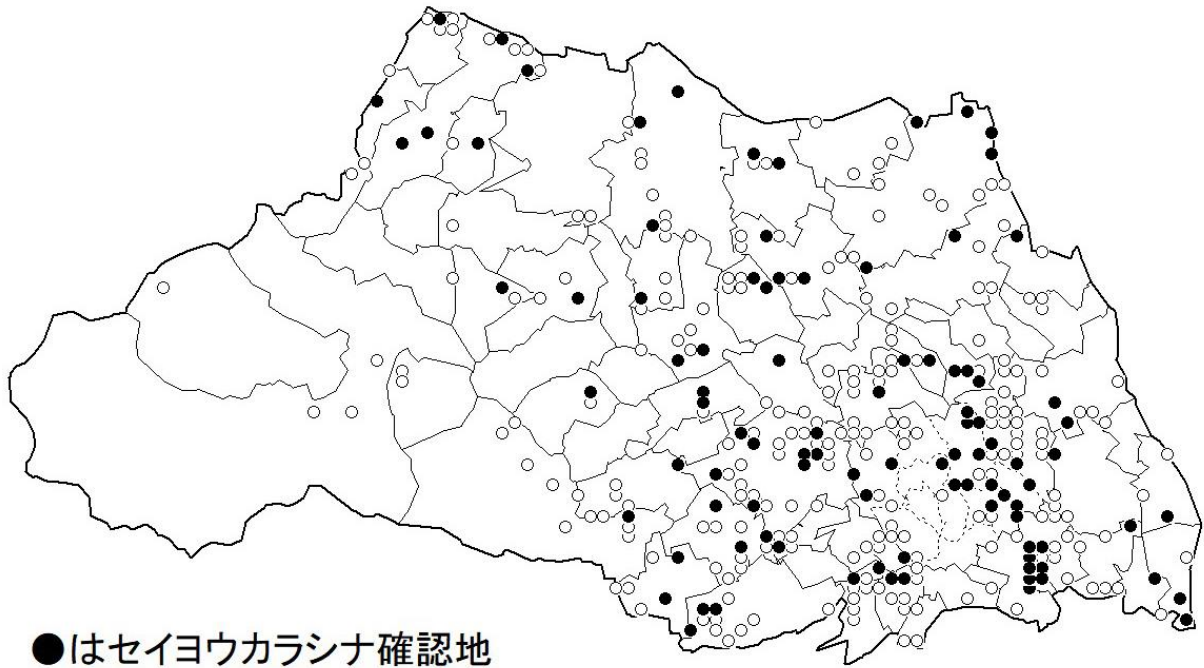
分布状況 今回の調査では、丘陵北、丘陵南、荒川西台地、大宮台地、加須・中川低地から多くの報告があった。特に荒川西台地から東側に多く分布が確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば低山東、低山西、山地、垂高山県を除く県内のほぼ全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では荒川西台地、大宮台地、加須・中川低地の分布が確認された。

環境別報告件数 211 件の報告があった。報告件数が多い外来種の一つである。生育地は河川敷と市街地が、共に 34.1%と同数で並び、水田・休耕田・畑が 29.9%と続く。雑木林には少ないものの環境にかかわらず至るところに分布を広げている。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	1.9
河川敷	B	72	34.1
水田・休耕田・畑	C	63	29.9
市街地	D	72	34.1
合計		211	100

種の概要 芽生えの段階ではススキと区別しにくいところがある。一般にススキは大きな株立ちとなるが、セイバンモロコシは株立ちにならず四方に地下茎を伸ばし均一に茎（稈）を立てる。生命力は強く、地下茎の切れ端があればそこから新芽を出して広がっていく。セイバンモロコシの侵入によってススキが駆逐されようとしている状況をよく見かけるが、分布域で比較すると、ススキは山地帯や低山帯など山間部も含めて県全域に分布しているのに対して、セイバンモロコシは山間部にはまだ侵入していない。

当該種の消長 畑の雑草として世界的に有名である。太平洋戦争後関東地方に見いだされるようになり、その後全国各地に広がったとされる。埼玉県においては 1998 年の調査で低地・台地上に広く分布しており、2011 年の調査においてもほぼ同様の分布である。今回の調査では県北の調査点も加わって台地や低地にはしっかり定着し安定状態にあるものと考えられる。



分布状況 今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告があった。低山西、低山東、山地、亜高山の報告はほとんどない。埼玉県植物誌 1998によれば今回の調査結果とよく似ている。県レッドデータブック 2011 の調査ではほぼ同様の結果となっている。

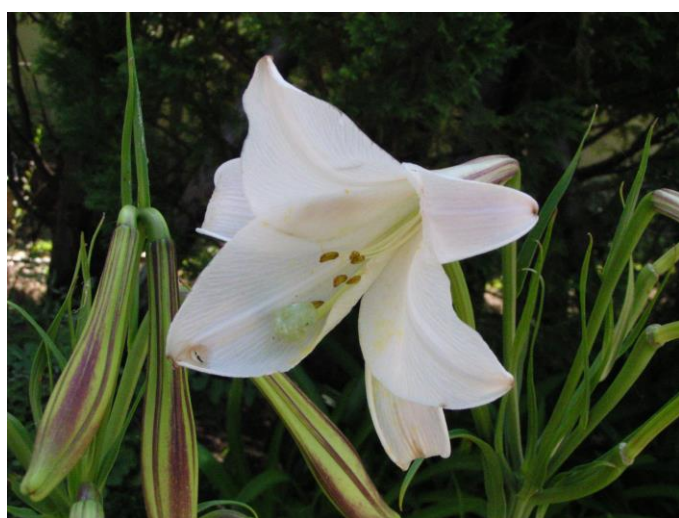
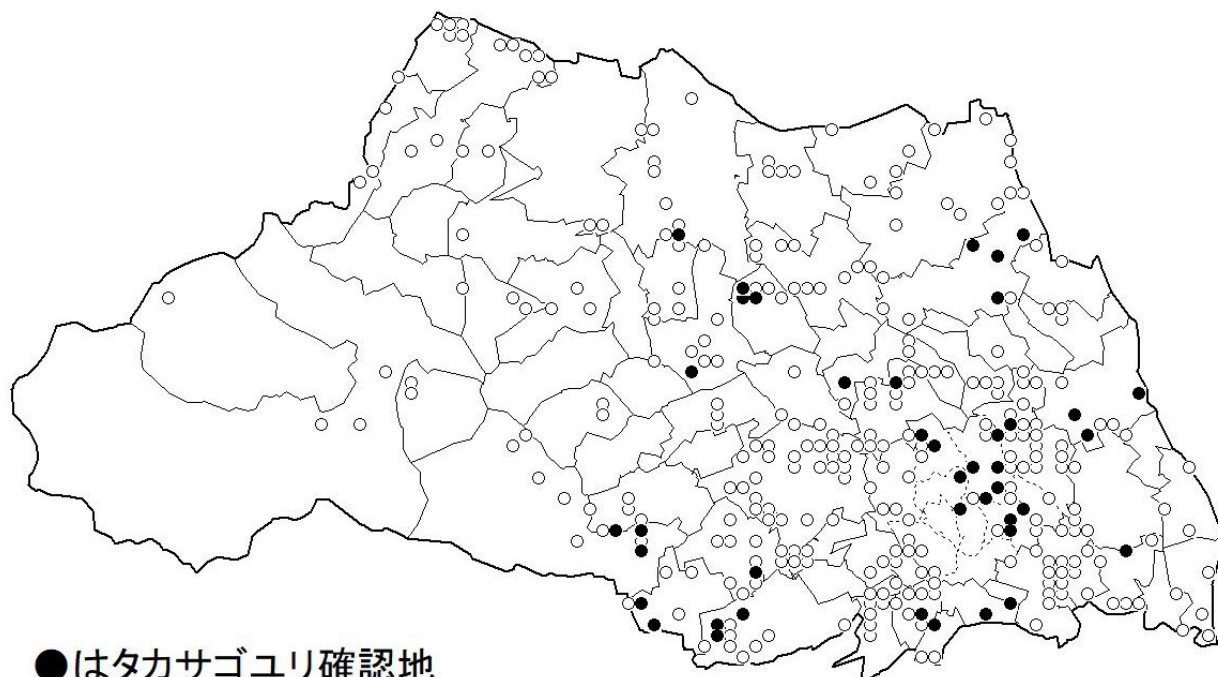
環境別報告件数 報告件数は 117 件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷 48.7%である。土手を埋め尽くすように咲く姿は一つの風物詩になっている。次いで水田・休耕田・畑が 26.5%を占める。こちらは土手を埋め尽くすような光景にはならないが、ごく普通に見かける状況にある。市街地でも 21.4%を占める。雑木林でも見かけないわけではないが、その数は少ない。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	4	3.4
河川敷	B	57	48.7
水田・休耕田・畑	C	31	26.5
市街地	D	25	21.4
合計		117	100

種の概要 土手を黄色に埋め尽くすものはすべてこのセイヨウカラシナ(別名カラシナ)と思われがちだが、最近ではセイヨウアブラナの侵入もあって、よく観察して区別する必要がある。簡単な区別点は、セイヨウカラシナの葉は葉柄があるのに対して、セイヨウアブラナは葉柄がなく茎を抱く。セイヨウカラシナの葉柄が短い場合もあるが茎を抱くことはない。開花の時期を比較すると、一般的には最初セイヨウアブラナが先に開花して、途中からセイヨウカラシナの開花が引き継ぐ格好になる。

当該種の消長 「日本帰化植物図鑑」によれば侵入時期ははっきりしない。県内の状況は、1998年丘陵帯以東で分布が確認されていた。2011年においても丘陵帯以東で分布が確認されている。今回の調査は県北部の調査点が少ないものの、およそ2011年の分布を維持していることが想定される。さらに調査を進める必要があるが、本種は生態系の中で安定的な地位を獲得していると考えられる。

30 タカサゴユリ(ユリ科) *Lilium formosanum* A.Wallace その他の総合対策外来種



分布状況 今回の調査では、加須・中川低地、大宮台地、丘陵南で確認された。荒川西台地の情報が不足していると思われる。県レッドデータブック 2011 の調査では県北と県南にごくわずか数件の報告しかない。

環境別報告件数 47 件の報告があった。生育地は市街地が最も多く全体の 72.3% を占める。次いで水田・休耕田・畑が、19.1% となる。雑木林や河川敷は少ない。一般的には比較的人家の近くに生育していることが多い。

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	2.1
河川敷	B	3	6.4
水田・休耕田・畑	C	9	19.1
市街地	D	34	72.3
合計		47	99.9

種の概要 近縁種にシンテッポウユリがあり、紛らわしい。花が咲けば本種は花被片の色が白地に赤褐色の帯が入るので、すべて白のシンテッポウユリとは区別がつく。とりあえず少しでも薄い褐色帯が認められれば本種として扱うのがよい。成葉だけのときは葉の幅で区別することになるが、この形質は個体ごとに連続していて区別はかなり困難である。

当該種の消長 外来種としてみるより鑑賞のためのユリという見方が強い。高速道路ののり面で、除草の作業員が本種だけを残して除草を終わらせている光景をよく目にする。ときに庭先で栽培している例も見受ける。花が大きくてきれいなことなど観賞価値があるため、保護される傾向があり今後も分布域を広げることになるだろう。2011 年データにくらべ分布域は大きく拡大した。

31 ナガバギシギシ(タデ科) *Rumex crispus* L. その他の総合対策外来種



ナガバギシギシ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	12	5.6
河川敷	B	78	36.3
水田・休耕田・畑	C	64	29.8
市街地	D	61	28.4
合計		215	100.1

になるであろう。

当該種の消長 1891年に東京で帰化が報じられ、現在では全国に広がって、道端や荒地に普通に見られる。繁殖力が強く、分布を広げている。本県では1998年には未確認市町村がいくつかあったが、今年度の調査でそれはほとんどなくなってしまった。

分

布状況 年度の調査では、ほぼ県内全域で確認されている。埼玉県植物誌1998では三郷・吉川・松伏・庄和・浦和・川口・鳩山・小川・飯能・名栗・荒川・両神・吉田を除く全域分布である。県レッドデータ2011の調査では二次メッシュ埼玉全54区画中36区画で分布が確認されている

環境別報告件数 今回は215件の報告があった。河川敷が36%で、水田・休耕田・畑30%、市街地28%で三者は横並びである。雑木林は非常に少ないといえる。広く環境に適応していると考えられる。

種の概要 全体はエゾノギシギシに似るが、茎は赤みを帯びる。茎の先に紅緑色の花を輪生するが、花の集まった段と段の間が離れていて、まばらに見え穂全体が長いので区別がつく。また、葉も細長く縁が波状に縮むのが特徴となる。成長段階としては、5-11月の期間中、いずれの月にも幼植物から結実までが確認されている。次々と発芽、成長が同時に行われている。分布の拡大や拡散の可能性が高いといわれているが、調査で実態が明らかになるにつれて適切な評価ができるよう



分布状況 今年度の調査では亜高山、山地、丘陵帯にはあまり分布していないことがわかる。平地で広範囲に確認されている。埼玉県植物誌 1998 では秩父域、県北部、県東部の北で確認されている。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 28 区画で分布が確認されており、全区画の半分の確認となっているが、そこには県西部、県南部の分布も含まれている。

ハルシャギク

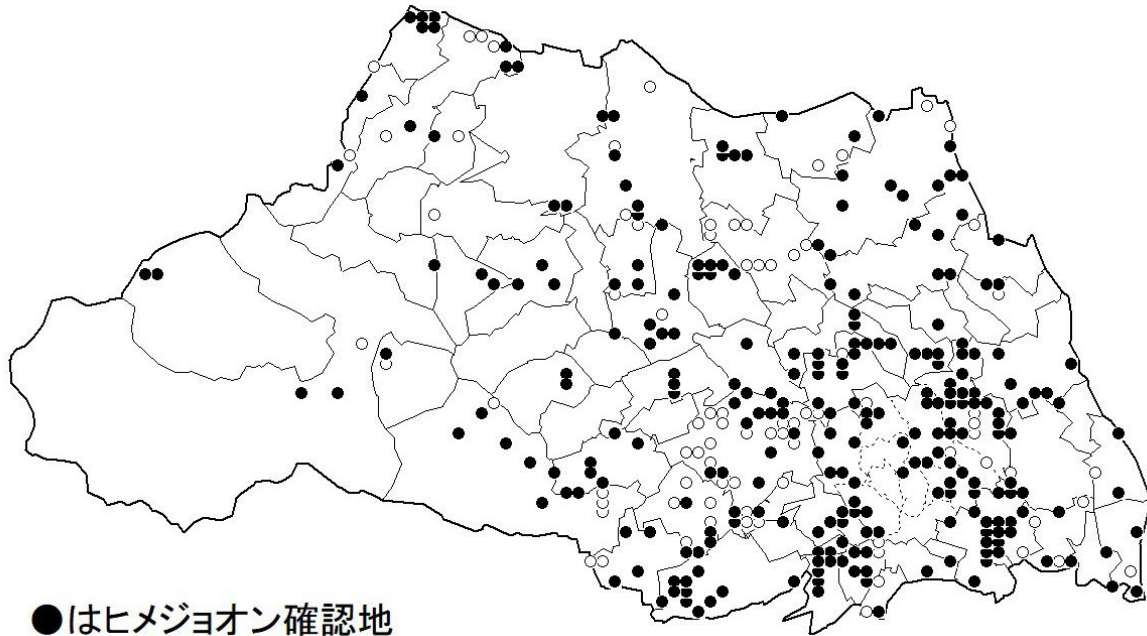
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	2.4
河川敷	B	16	38.1
水田・休耕田・畑	C	13	31
市街地	D	12	28.6
合計		42	100.1

環境別報告件数 報告件数は 42 件。

雑木林はごく少なくわずか 1 件である。河川敷が最も多く 38%、水田・休耕田・畑と市街地は各 30%ほどで、雑木林以外の環境には、ほぼまんべんなく分布している。

種の概要 別名ジャノメソウ。日あたりを好む傾向がある。コスモスに似た花の中心部分は紫褐色、その周りは黄金色に縁どられ、蛇の目傘を思わせる。生活段階としては、成葉は、4-8 月、つぼみは 4-11 月。開花は 4-8 月、結実は 7-8 月となる。6-8 月の最盛期には大きな群落を作ることもある。生態系の被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えているというが、その実態がはっきりしない。さらに調査を進める必要がある。

当該種の消長 明治初期に渡来。古くから良く知られた園芸植物で、強健なため各地の空き地で野生化している。種子は自然にこぼれて発芽し、日当たりの良い庭や空き地などに毎年生える。しばしば大きな群落を作る。分布は 1998 年のころは全県に及んでいなかったが、2011 年頃にはほぼ全県をカバーし、今年度の調査は県全域分布を裏付ける結果となった。



分布状況 今年度の調査では、県内ほぼ全域で確認されている。埼玉県植物誌 1998 によれば吉川町、三郷市、江南町を除き県内全域に分布するとなっているが、今年度の調査でそれらは埋められている。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 47 区画で分布が確認されており、県全域分布である。

環境別報告件数 373 件の報告があった。市街地 38%と、水田・休耕田・畑 33%が大きい。次いで河川敷、雑木林

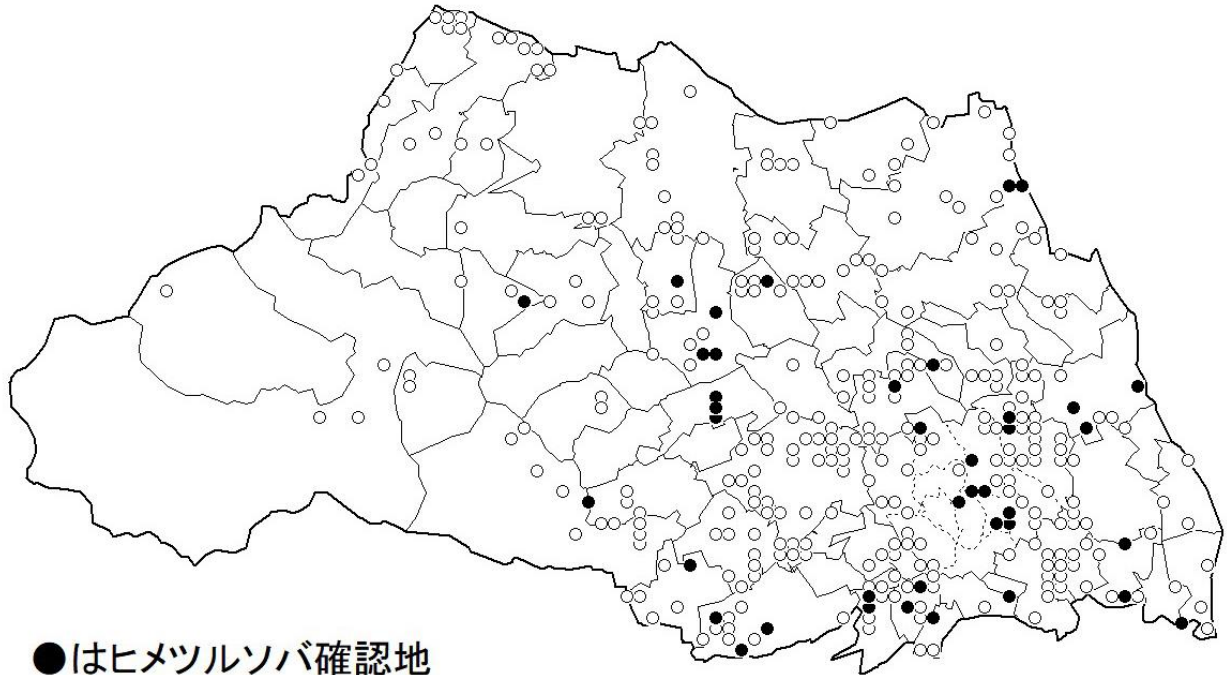
ヒメジョオン

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	36	9.7
河川敷	B	71	19
水田・休耕田・畑	C	123	33
市街地	D	143	38.3
合計		373	100

の順になる。雑木林の分布率が低いのは外来種一般に共通した傾向であるが、他の外来種に比べればヒメジョオンは高い数値を示している。

種の概要 ハルジオンとよく似るが、茎には白い髓が詰まっており、根生葉は長い柄があり円形に近く、大きな鋸歯がある。花期には根生葉は消える。ハルジオンに遅れて咲きだす。成長段階としては、幼植物、成葉は 4-12 月の間いつでも見られる。つぼみ、開花、結実も 5-12 月を通して確認している。季節感の乏しい植物と言える。生物多様性を保全する上で重要な地域に侵入し、定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本県ではまだ該当例を聞いていない。調査を続け、詳細なデータの集積に努めたい。

当該種の消長 江戸時代末(1865 年ごろ)に観賞用植物として導入された。その後逸出し、明治初年には雑草化している。繁殖力が強く、刈り取っても残った根茎で再生するため分布を広げている。すでに在来種と共存定着しており増減については大きな変動はない。



ヒメツルソバ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	2
河川敷	B	4	8.2
水田・休耕田・畑	C	8	16.3
市街地	D	36	73.5
合計		49	100

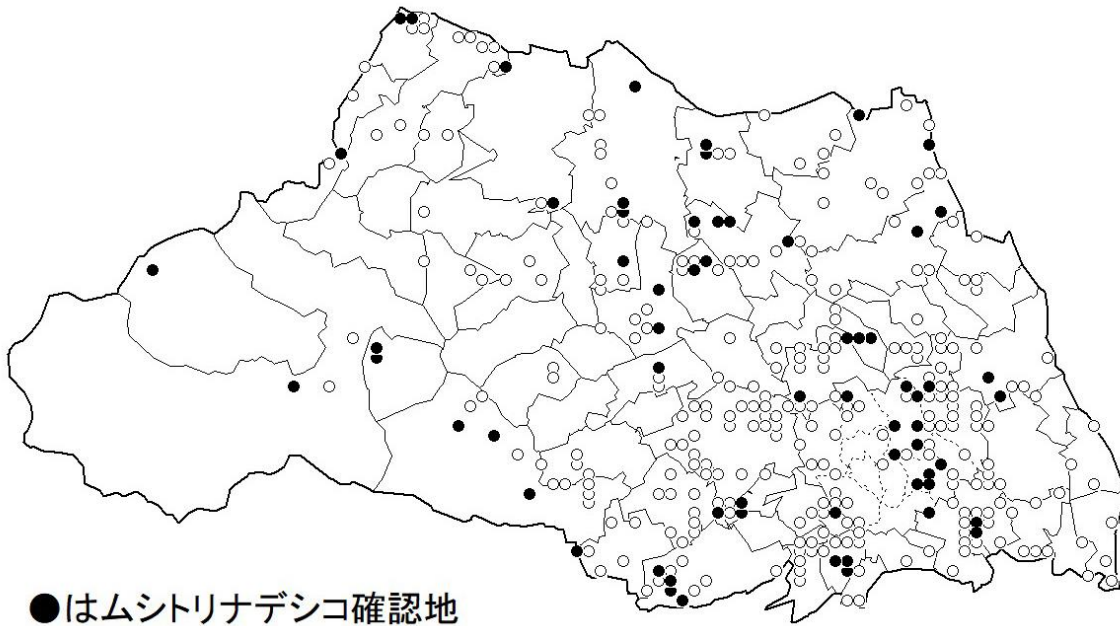
分布状況 今年度の調査では県東部、大宮台地、荒川西台地、丘陵南で分布が確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば日高、ふじみ野、富士見、和光、桶川で確認されているのみである。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 13 区画で分布が確認されている

環境別報告件数 総報告件数は 49 件であった。市街地の報告が圧倒的に多く 74% を占めた。次いで水田・休耕田・畑 16% となるが、市街地の数値は他を圧倒している。

市街地の標徴種的存在の外来種といえる。

種の概要 本種は路傍でよく見かける。この性質があり、立ち上がることはほとんどない。つるのようにはならない。枯れても多年草なので毎年同じ場所に芽を出す。直径 7-8mm のピンクの花（花序）を長期間にわたって咲かせる。ピンクは日が経つにつれ白色がかったいく。生態系被害防止外来種リストにおいて、その他の総合対策外来種となっているが、ヒメツルソバが広がることで不都合な点はあまり聞かない。下水溝をふさぐくらいのデメリットはあるかもしれない。

当該種の消長 明治時代、園芸用として導入された。その後逸出して野生化した。県内の状況を見ると、1998 年には県南にわずかに見られたものが、2011 年には分布域が広がり、日高、ふじみ野、富士見、和光、桶川、所沢、入間、狭山、飯能、川越、浦和、越谷、草加が分布域となった。そして今年度の調査では、東秩父、鳩山、東松山、吉見、坂戸、毛呂山、新座、朝霞、さいたま、上尾、伊奈、庄和、八潮が加わった。本種の分布域は現在進行形でも拡大しつつある。



分布状況 今年度の調査では報告件数はそれほど多くはないもののほぼ県全域から報告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、いくつかの市町村からは報告がないものの、ほぼ県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 37 区画で分布が確認されている

環境別報告件数 75 件の報告があった。最も報告の多かった生育地は市街地 51%であった。次いで水田・休耕田・畑 31%である。両者で 82%となる。

本種は河川敷にも出現するがそれほど多くはない。雑木林周辺ではほとんど見かけない。日あたりを好む特徴が数値と連動しているように思える。

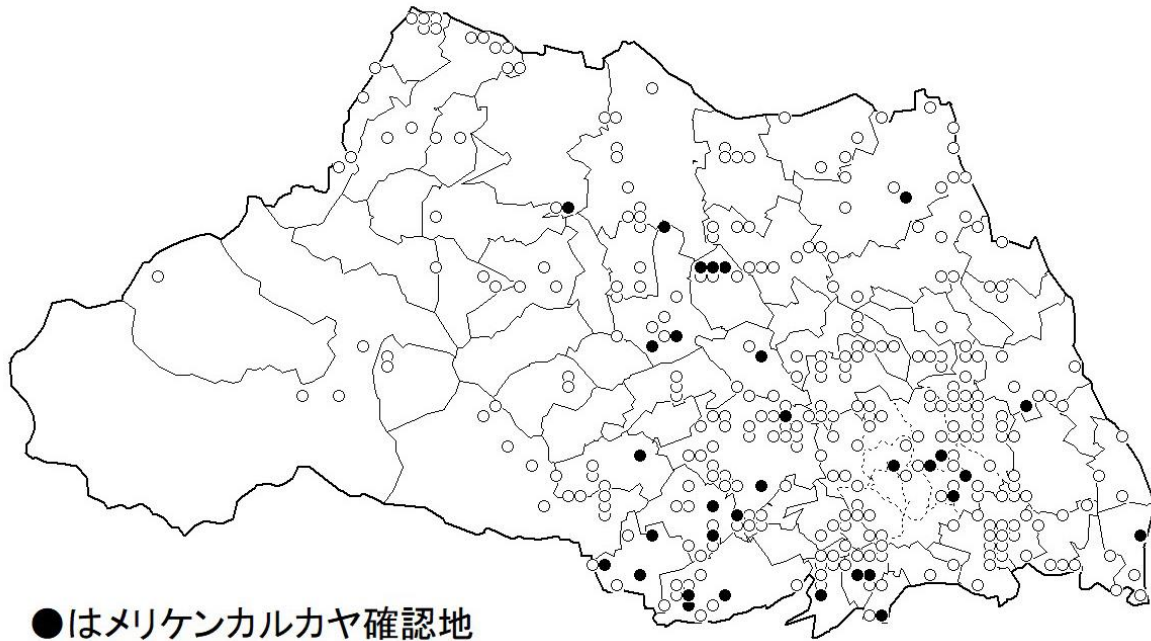
ムシトリナデシコ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	2.7
河川敷	B	12	16
水田・休耕田・畑	C	23	30.7
市街地	D	38	50.7
合計		75	100.1

種の概要 ナデシコ科の植物の中でかなり大きな特徴をもった植物である。茎の節間に粘る部分があり、ときどき

小昆虫が捕まっている。そのことから別名ハエトリナデシコとも呼ばれる。しかし粘る部分がほとんどない場合もある。本種は食虫植物ではない。葉の色は特徴的な粉白色で、葉の基部は茎を抱く。紛らわしい種はほかにない。

当該種の消長 江戸末期、花卉として導入された。その後逸出し野生化した。県内の分布状況は 1998 年の調査ではほとんど全域分布ではあったが、皆野、寄居、小川、東松山、川越、入間、越谷など 20 市町村からの報告はなかった。2011 年の調査では小川、東松山、日高、吉川、庄和など 10 市町村のみが報告のない状況になった。つまり分布域が少し拡大したわけである。そして今回の報告はほぼ 2011 年と同じような分布を示している。したがって本種はほぼ県全域に分布しているとはいいいながら、まだ報告のない市町村がいくつかあり、詳しく見ればさらに分布が広がる余地を残している。



分布状況 今年度の調査では主に大宮台地、荒川西台地、丘陵南に確認された。昨年度の調査結果とよく似ている。埼玉県植物誌 1998 には加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の分布がある。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 28 区画で分布が確認されている。

環境別報告件数 今回の調査では 33 件の報告があった。市街地の報告が最大で 46% を占める。次いで水田・休耕田・畑が 36% となっている。この二者で 82% を占める。雑木林や河川敷は少ない。

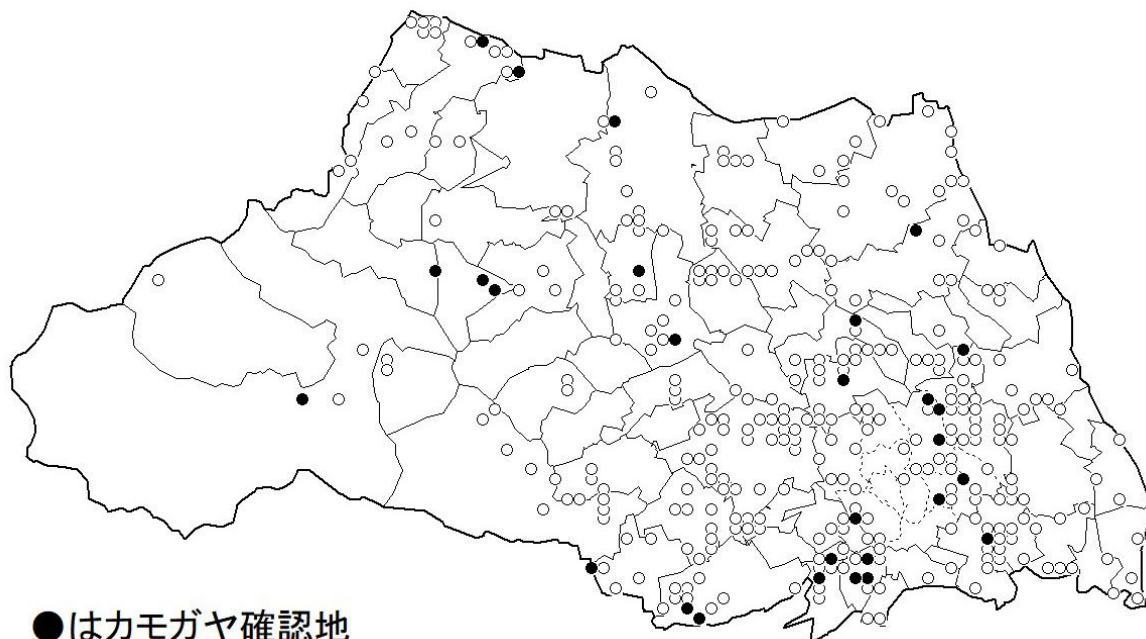
メリケンカルカヤ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	9.1
河川敷	B	3	9.1
水田・休耕田・畑	C	12	36.4
市街地	D	15	45.5
合計		33	100.1

種の概要 叢生(株立ち)していることが多く単独で大きな群落をつくる傾向がある。比較的乾燥した日当たりのよい場所によく見かける植物である。ふさの軸にきわめて長い毛が密生しており、どれが小穂なのかわかりづらい。本種は作物被害が懸念されているが、繁茂することによる不都合な例は今のところ聞いていない。

種の消長 昭和 20 年代、愛知県で発見されたのが始まりである。現在はおよそ関東地方以西に分布を広げている。本県では 1998 年の段階で丘陵帯から低地帯にかけて分布していることを確認しているが、2011 年の段階でも分布域に大きな変動はない。今年度の調査では、報告のあった 33 件が広域に広がっており、このことから実際の分布はもっと広がっている可能性がある。さらに調査を進める必要があるが、全般的に見て本種は定着段階にあり、安定しているというべきだろう。

37 カモガヤ(イネ科) *Dactylis glomerata* L. 産業管理外来種



●はカモガヤ確認地



分布状況 今回の調査で大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、東秩父、秩父からの報告があった。ほぼ低地～台地～丘陵に分布する。埼玉県植物誌 1998 によれば県内全域の分布であった。狭山、ふじみ野、幸手は未確認であった。県レッドデータブック 2011 の調査では、二次メッシュ埼玉全 54 区画中 44 区画で分布が確認されている。54 区画中の 11 区画は埼玉分がごくわずかに関わる区画なので、ほぼ全県分布といえる。

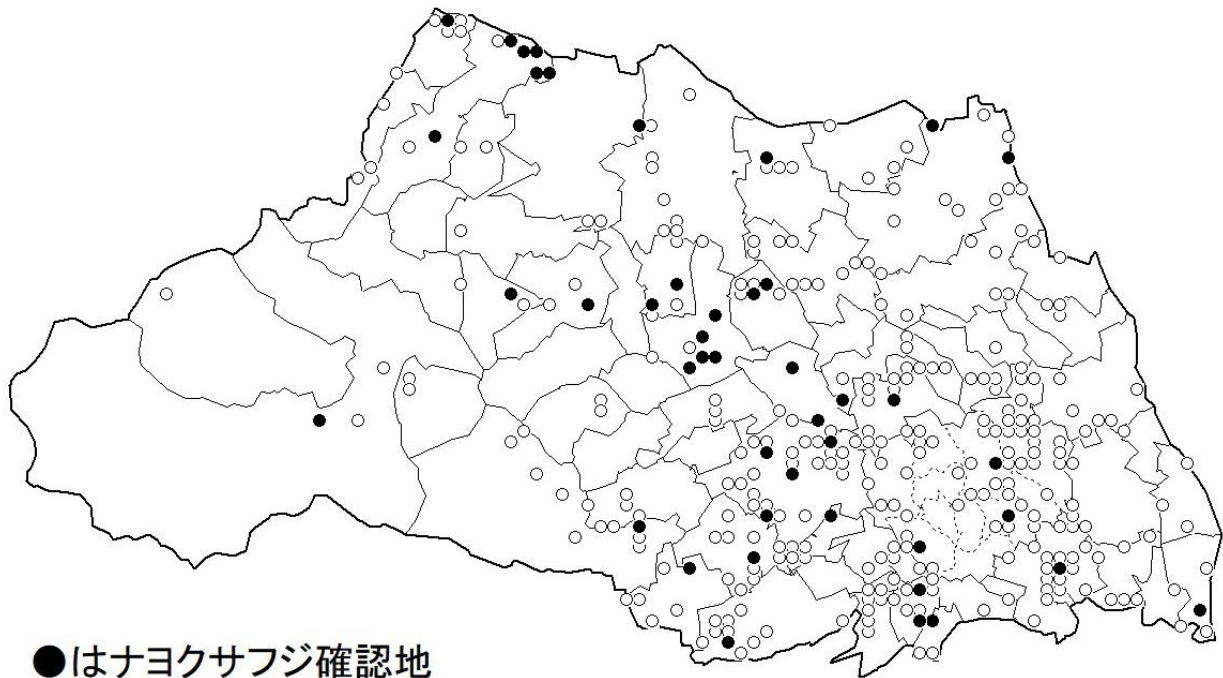
環境別報告件数 29 件の報告があった。最も多かったのは河川敷 35%である。しかし水田・休耕田・畑 28%や市街地 28%も多く、環境を選ばずに広域に分布している可能性がある。雑木林のデータ数は少ないが、3 年間のデータから考察するのが適切である。

カモガヤ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	6.9
河川敷	B	10	34.5
水田・休耕田・畑	C	9	31
市街地	D	8	27.6
合計		29	100

種の概要 花粉症の原因となるイネ科植物である。開花は5月から8月頃の間である。もともと本種は牧草として輸入されたもので、開花の前に刈り取ってこれを干し、家畜の飼料とした。1年の間に何度も刈り取ることができ、その干草はたんぱく質など栄養分を多く含む良質の牧草とされた。また英名 cocks-foot grass の通り、ニワトリの飼料としても利用されたのであろう。産業管理外来種とされるのは、牧草としての用途がある一方で人体に対する健康被害もでていることから、本種は野放しにしないで、適切な管理の下で利用すべきものとして指定されたものである。

当該種の消長 明治初期、牧草としてアメリカから輸入された。オーチャードグラスとの呼び方も広く流通している。その後逸出、野生化し、無管理状態で在来生態系に混じるようになった。現在では県内各地にまんべんなく広がっており、安定的に定着しているものと思われる。



●はナヨクサフジ確認地



分布状況 今回の地調査では、大宮台地と荒川西台地、丘陵南、丘陵北で確認された。埼玉県植物誌 1998 によれば、児玉、熊谷、川島での記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査で深谷、寄居、秩父、川越、桶川、三郷で新たに観察された。これは二次メッシュの集計でみると、埼玉全 54 区画中 9 区画の分布となる。

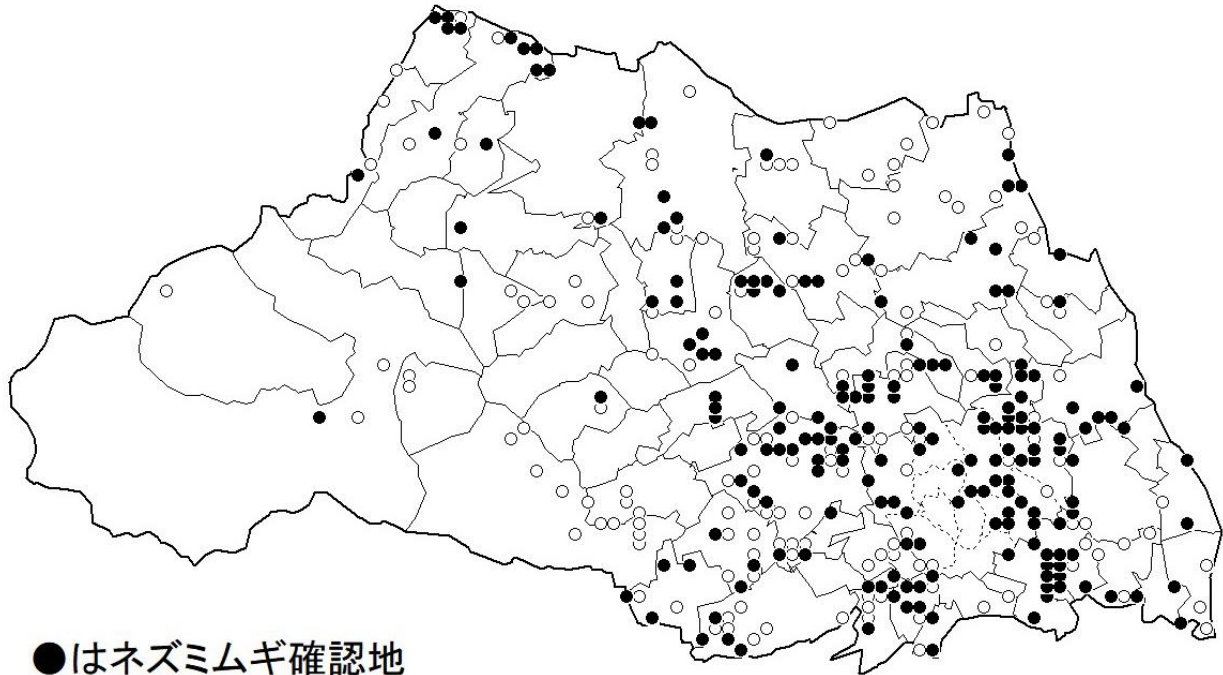
環境別報告件数 55 件の報告があった。最も多くみられる環境は河川敷で 49%であった。次いで、水田・休耕田・畑 29%、市街地 13%の順になる。この出現率の傾向は昨年度の結果と同じである。

ナヨクサフジ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	9.1
河川敷	B	27	49.1
水田・休耕田・畑	C	16	29.1
市街地	D	7	12.7
合計		55	100

種の概要 つる性の 1 年性草本で、葉の先が巻きひげ状になり他物に絡みつく。茎は四方に広がり地面を覆う。春から夏にかけて葉腋に花序を立て、紫色の蝶形花を一方向に穂状につける。本種の茎や葉は毛がほとんどないこと、旗弁の爪部が舷部のほぼ 2 倍あることで、クサフジと区別する。本県では、河川敷や土手に分布を広げており、今後在来植物に影響を与えると思われる種として位置付けられている。空中窒素の固定や、アレロパシー作用により、土壤環境に影響を及ぼす可能性が指摘されている。

当該種の消長 1943 年に熊本から帰化が記録され、その後長野県、群馬県で確認された。本県では 1998 年ころは緑肥として使われたようだが、逸出して河川敷に分布を広げている。今でも緑肥として使われている例は多い。分布は 10 年のスパンで比較すると拡大の傾向がうかがえる。



●はネズミムギ確認地



ネズミムギ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	10	4.1
河川敷	B	77	31.3
水田・休耕田・畑	C	81	32.9
市街地	D	78	31.7
合計		246	100

分布状況 今回の調査では山間部を除く県内全域から報告があった。昨年は加須・中川低地の利根川沿いの報告が少なかったが、今年度はそれら地のデータも充実した。埼玉県植物誌 1998 によれば山間部（飯能、秩父大滝・荒川、小鹿野）を除いた全域分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 39 区画で分布が確認されている。

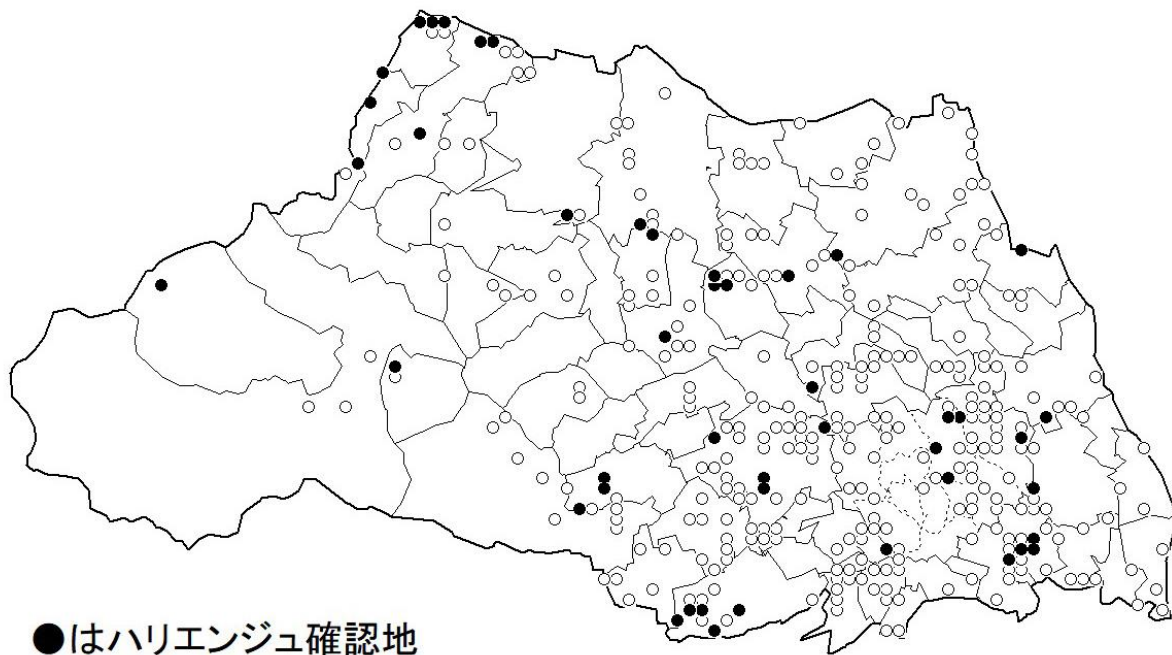
環境別報告件数 今回の報告件数は 246 件であった。水田・休耕田・畑 33%、市街地 32%、河川敷 31%ある。三者拮抗である。路傍、空地、荒地、

残土置き場など環境を選ばず至るところに分布している。雑木林だけ少ないのは、ネズミムギが攪乱地を好むことが原因していると考えられる。

種の概要 本種は越年草である。花粉症の原因になっている。また果実は有毒でアレロパシー効果があるとされているが、牧草として使われてきた事実と矛盾するように思う。河川敷に多いということは、比較的多湿を好む植物といえるかもしれない。生育地では、広く集合して単独の群落をつくる傾向があり、侵略的な外来種としての特性を発揮している。類似種にホソムギがあり、形態が連続しているとの見方もでき区別が難しい。本種の小穂は小花 10 以上で護穎に芒がある。ホソムギの小穂は小花 10 以下で護穎に芒はない。

当該種の消長 もともとは牧草として明治初期に導入された。道路のり面にも利用されてきた。その後逸出して完全に野生化した。道路の土留めや緑化に利用されるところから山間部にも分布がありそうだが、今のところ報告はない。以前からの分布図（植物誌・レッドデータ）と比較する限り、ほぼ各種の生態系に混入してすでに安定的な位置を占めていると考えられる。

40 ハリエンジュ(マメ科) *Robinia pseudoacacia* 産業管理外来種



分布状況 今回の調査ではほぼ県内全域に分布が見られる。ただし加須・中川低地、中川・利根川沿いからの報告はない。埼玉県植物誌 1998 によればほぼ県全域に分布しているが、吉川・松伏・庄和・妻沼・岡部・吉見・鳩山・毛呂山・越の報告はない。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 43 区画で分布が確認されている。これは県内全域分布を表している。

環境別報告件数 報告件数は 67 件であった。報告件数の最も多い環境は河川敷で 36%ある。次いで水田・休耕田・畑 28%となる。市街地 22%、雑木林 13%、これらの数値はハリエンジュが河川敷で旺盛に繁茂するものの、総じてほぼ環境を選ばない拡がり方をしていること示している。

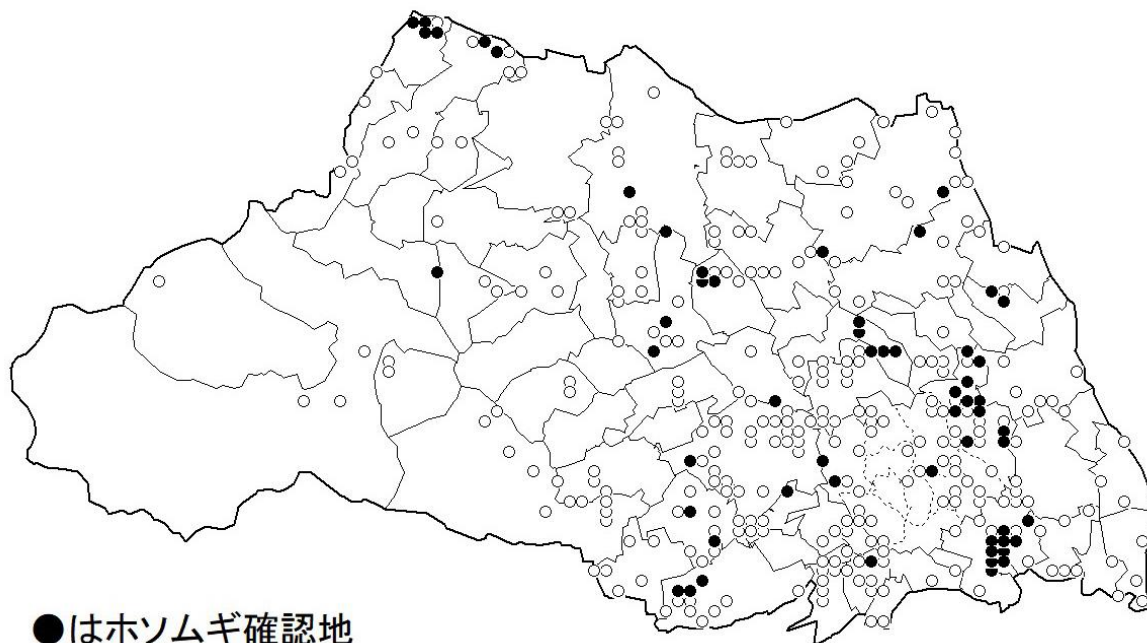
ハリエンジュ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	9	13.4
河川敷	B	24	35.8
水田・休耕田・畑	C	19	28.4
市街地	D	15	22.4
合計		67	100

種の概要 5-6 月、小枝の葉腋からフジの花に似た白い蝶形花を房状に多数咲かせる。葉は長い柄を持った 3 出複葉。枝には鋭い刺がある。生活段階としては、幼植物は 5-11 月、開花は 5-10 月、結実は 5 月となっている。5-7 月には、幼植物から結実までが、ほぼ同時期に確認されている。本種は、実生、萌芽による繁殖が旺盛に行われ、非常に成長が速く、短期間で群落をつくるため、生態系に被害をもたらす可能性が高いとされる。特に絶滅危惧種の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いとされる。

当該種の消長 1873年に導入され、荒廃地の緑化、街路樹、砂防林として植栽されたものが、逸出して拡大し全国的に分布した。本県でも1998年以前から分布の拡大を続け、ほぼ全域で確認されている。伐採もされているが、良質の蜜源でもあり、利益とリスクを検討する必要がある。

41 ホソムギ(イネ科) *Lolium perenne* L. 産業管理外来種



●はホソムギ確認地



分布状況 今回の調査では大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北から報告があった。埼玉県植物誌 1998 では秩父地域と狭山・日高・飯能を除いた全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 35 区画で分布が確認されている

環境別報告件数 報告件数 66 件であった。最も多く出現するのは水田・休耕田・畑 35% である。次いで河川敷 33%、市街地 24% となる。雑木林には少ないものの環境を選ばずどこにでも自生する。ネズミムギとの区別が難しく、あるいは誤

認の可能性がありうる。

ホソムギ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	7.6
河川敷	B	22	33.3
水田・休耕田・畑	C	23	34.8
市街地	D	16	24.2
合計		66	99.9

種の概要 類似種にネズミムギがあり区別が難しい。本種は多年草である。(ネズミムギは越年草である。) とりあえず、小穂に芒のないものをホソムギとする。さらに 1 小穂中の小花の数が 10 個以下であればホソムギでよい。し

かし、多くの標本を観察するとネズミムギとホソムギの境がはっきりしなくなることがある。両者の雑種にネズミホソムギというのがあり、どちらにも振り分けられない場合はこのネズミホソムギを充てる場合もある。分布域をネズミムギとホソムギで比較するとネズミムギの方が広い。なお、日本イネ科植物図譜によれば、日本に純粋なホソムギはほとんどなく、雑種のホソムギが多くあると指摘している。

当該種の消長 明治初期、ネズミムギなどとともに牧草として導入された。その後逸出し、野生化した。県内では、埼玉県植物誌 1998 においても県レッドデータブック 2011 にしても分布域は加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、低山東、低山西に及んでおり、大きな相違はない。安定した状態にあるとみてよい。

42 アイノコセイヨウタンポポ(キク科)

Taraxacum officinale Weber ex F.H.Wigg. x *T. platycarpum* Dahlst. 重点対策外来種



●はアイノコセイヨウタンポポ確認地



分布状況 今年の調査によれば、全観察地点の1/4くらいでアイノコセイヨウタンポポが確認された。頻度の高い分布ではない。県東部、県北部、秩父域の報告件数はごくわずかである。埼玉県植物誌 1998 では記載がない。また県レッドデータブック 2011 でも記載がない。

環境別報告件数 報告件数 107 件であった。雑木林の分布が最も少なく市街地が最も多い傾向あるものの、環境にかかわらずほぼ全域に分布しているというのが妥当だろう。

アイノコセイヨウタンポポ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	10	9.3
河川敷	B	22	20.6
水田・休耕田・畑	C	36	33.6
市街地	D	39	36.4
合計		107	99.9

種の概要

本種はセイヨウタンポポ *Taraxacum officinale* とカントウタンポポ *T. platycarpum* との雑種とされている。注目点は総苞片の形状である。総苞片の先端は三角状の突起になり、カントウタンポポに似ているが、総苞片の開出する点がカントウタンポポと合わない。しかし総苞片の開出の程度はまちまちで、やや

反曲するもの、平開するもの、斜上するものなど様々で、セイヨウタンポポのように完全に反曲しない。ところが現在のところ、本種は雑種としての位置づけが不明瞭のまま取り扱われている傾向がある。したがって本種がいずれかの種として記録されている可能性がある。

当該種の消長

本種はここ 10 年の間に急速にその分布域を拡大している可能性がある。ただし証拠立てるものがない。今年度の調査においても本種をカントウタンポポまたはセイヨウタンポポとして誤認の可能性がある、精査すればさらに精度の高い分布図が得られると思う。



●はハナニラ確認地



分布状況 今年度の調査では分布が県南部、県西部に寄っていて、比較的都市部の外来種としてのイメージが強い。県北部、秩父域の報告件数はわずかである。埼玉県植物誌 1998 では県東部と県南部に散在する。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ 18 区画で報告がある。多く繁茂する外来種ではない。

環境別報告件数 報告件数 37 件であった。あまり環境を選ばず広く分布しているように見えるが、市街地のシェアが 43% と大きく、市街地を標徴する特性があるようにも思える。

ハナニラ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	13.5
河川敷	B	8	21.6
水田・休耕田・畑	C	8	21.6
市街地	D	16	43.2
合計		37	99.9

種の概要 まぎらわしい類似種は存在しない。葉に食用ニラの香りがあり、和名がつけられたのであろう。地下に鱗茎があり、鱗茎が栄養繁殖するため、集団で群がるようになる。春先、1つの鱗茎からは数枚の葉が束生し、中心部に花茎が数本立ち、1花茎に花が1個つく。茎が立ち上がることはなく、葉は根生葉のみである。花径は

3cm程度、大きく目立ち美しい。花色は白を基調とするが淡紫の条がある。花被片の基部は合生して筒状になる。

当該種の消長 明治のころ花卉として導入された。その後日本の環境によく適応して逸出し旺盛に繁殖している。自生状況はごく安定した状態で推移しており、野生化して定着したものと考えられる。今後分布域が広がる様相はなく、侵略的外来生物の立場からは、「その他の総合対策外来種」として位置付けられているが、特に対策を講じなければならないものではない。



分布状況 今年度の調査では分布が県南部、県東部、県北部に広く分布している。県西部の丘陵帯や秩父域はほとんど報告がない。埼玉県植物誌 1998 では分布が本庄・深谷・熊谷等、県北部に局在する分布になっている。また県レッドデータブック 2011 の調査では県の北半分（県北部と県東部北域）に広がっている。

環境別報告件数 報告件数 36 件であった。雑木林にはほとんど分布しない。河川敷や水田・休耕田・畑のシェアも高くない。逆に市街地は 58% になっており突出している。本種は今回のデータからは、市街地を標徴する種と言えそうである。

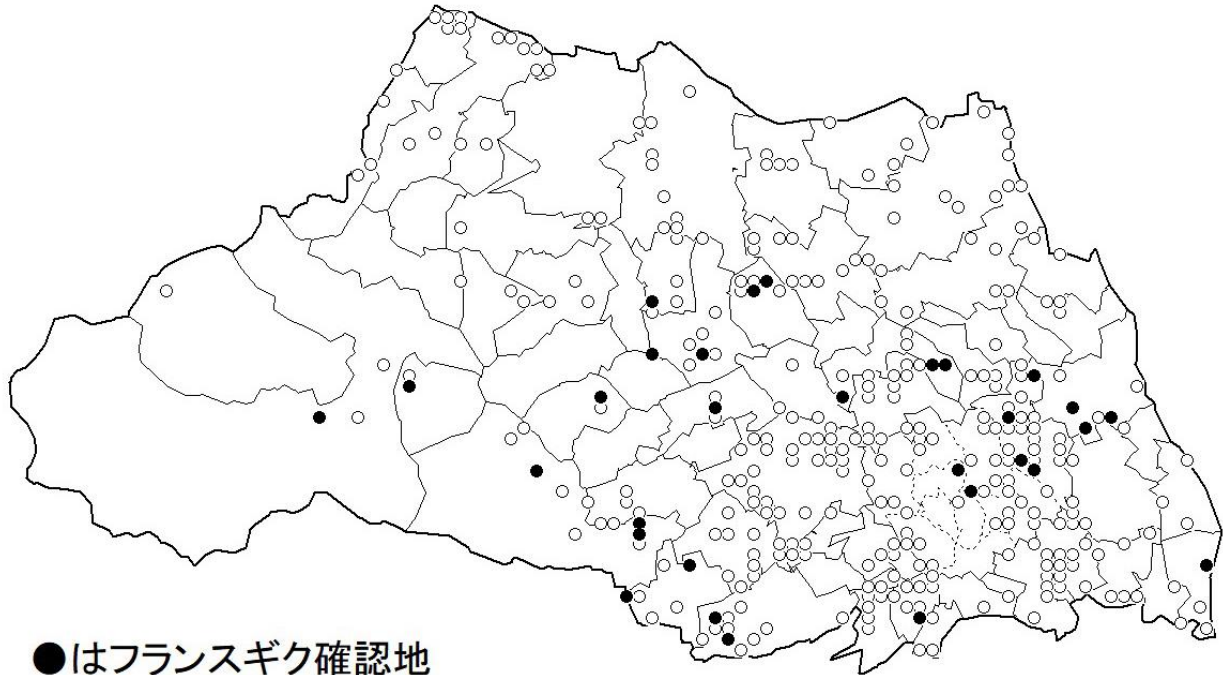
ヤナギハナガサ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	2.8
河川敷	B	6	16.7
水田・休耕田・畑	C	8	22.2
市街地	D	21	58.3
合計		36	100

種の概要 類似種にアレチハナガサがある。ヤナギハナガサの花筒は細長く筒部がピンク色となって目立ち、アレチハナガサの花筒は短いため花筒は目立たない。そのため、全体としてみたとき、ヤナギハナガサの方が花色

に彩りがあり華やかに見える。さらにヤナギハナガサが市街地優先なのに対して、アレチハナガサは河川敷優先の傾向がみられる。こまかく区別点を比較すると、ヤナギハナガサのがく裂片は短く、葉はやや茎を抱く。これに対してアレチハナガサのがく裂片は長く、葉は茎を抱かない。最近両者の中間形態を持つダキバアレチハナガサが侵入している可能性があるが、まだ確認されていない。

当該種の消長 もともとは昭和初期、戦後東海地方から全国に広まったといわれるが諸説がある。県内では北部の方から全県に広まったように感じられる。侵略的外来生物の立場から「その他の総合対策外来種」と位置付けられているが、対策を講じなければならぬほどの脅威はない。ただ少しずつ広まっているという認識は共有する必要がある。



●はフランスギク確認地



フランスギク

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	8.8
河川敷	B	8	23.5
水田・休耕田・畑	C	9	26.5
市街地	D	14	41.2
合計		34	100

分布状況 今年度の調査では埼玉県全域の南半分地域に報告があった。都市部というよりも丘陵や山間部ではない「里山」的環境に順応している。埼玉県植物誌 1998 では児玉と大滝に各 1 件の報告があるのみである。県レッドデータブック 2011 の調査では秩父・深谷・羽生・名栗・入間・所沢・和光の 7 点くらいの報告しかない。

環境別報告件数 報告件数 34 件であった。環境を選ばず広く分布する種と考えられるが、市街地のシェアは 41% で大きい。本種は市街好み、という表現ができなくもないが、むしろ人家の栽培品から逸出した子孫が野生の大半を占めていると考えられ、これが直接の原因であろう。

種の概要 フランスギクは草本で茎はやわらかく茎・茎葉とも冬は枯死する。多年草でロゼット葉だけは越冬する例が多い。フランスギクをマーガレットと間違える例がある。これはフランスではフランスギクを Marguerite と呼ぶために起きた誤解である。マーガレットは別名モクシユンギクといわれるように木本である。茎についた葉は落葉せずそのまま越冬する。両者は葉の形も違う。

当該種の消長 もともと江戸末期に由来するが、現在でも園芸品として庭園で栽培されている例が多く、外来種としての認識は広まっていない。本種は野生でも十分に自立して生き残る勢いがあり、今後も人の移動とともに分布域が拡大する可能性はある。侵略的外来生物の見地から「その他の総合対策外来種」に位置づけられてはいるが、対策を講じる必要は今のところない。



●はオニウシノケグサ確認地



分布状況 今回の調査では報告件数が少ないので分布の傾向は不明である。とりあえずは県内全域に広がっている。超対象種ではないので記録から漏れていることが考えられる。埼玉県植物誌 1998 では両神・岡部・名栗を除く県内全市町村に分布がある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 46 区画で分布が確認されている。

環境別報告件数 報告件数 24 件であった。河川敷や水田・休耕田・畑に多く両者合わせて 71%である。雑木林にはほとんど出現していない。

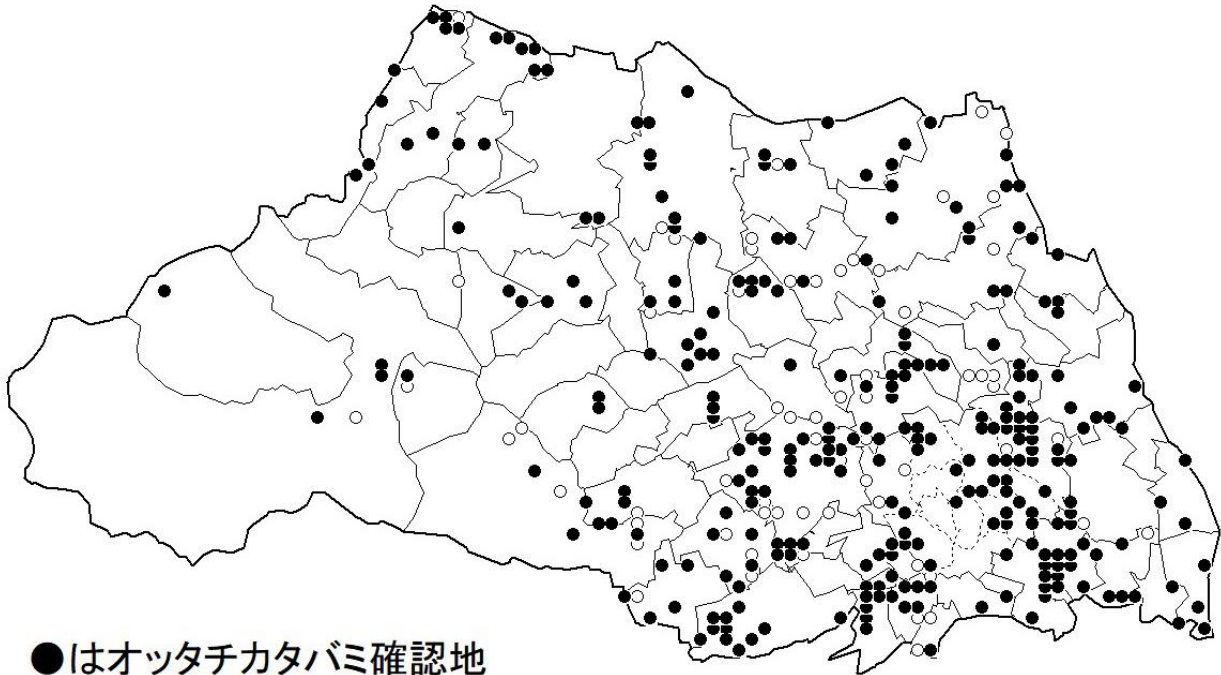
オニウシノケグサ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	4.2
河川敷	B	8	33.3
水田・休耕田・畑	C	9	37.5
市街地	D	6	25
合計		24	100

種の概要 類似種にヒロハウシノケグサがあり区別が難しい。両者ともに葉鞘の上縁は葉耳となる。葉耳に縁毛があればオニウシノケグサ、縁毛がなければヒロハウシノケグサとする。しかし、紛らわしいものがあり、縁毛の有無の判断に迷うことがよくある。迷う場合は、縁毛が1本でもあればオニウシノケグサ、全く毛が認められないものはヒロハウシノケグサとする。護穎の先端が芒になるかどうかも区別点として使える。芒がなければヒロハウシノケグサ、芒があればオニウシノケグサとなる。しかし、この芒も長短があり芒がない場合も含めて判断しにくいことがある。少しでも芒的であればオニウシノケグサとする。

当該種の消長 牧草または道路新設の法面処理のために大量に種子が輸入された。今年度の調査では、報告件数は少なかったが県内全域に分布しているものと推定される。産業管理外来種として位置付けられており、開発の代名詞的存在である。攪乱地に数多く分布し、すでに県内広域に広がっており定着段階にあるものと考えられる。

47 オッタチカタバミ(カタバミ科) *Oxalis dillenii* Jacq. 一般外来種



●はオッタチカタバミ確認地



分布状況 調査対象種ではないが報告件数が多いので、他の侵略的外来種との比較のため記載する。今回の調査ではほぼ県内全域分布といってよい。埼玉県植物誌 1998 では分布が限られていた。羽生・加須・久喜・上尾周辺と、深谷方面、所沢・和光・鳩ヶ谷・越谷・松伏周辺であった。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 31 区画で分布が確認されている。

環境別報告件数 報告件数 398 件であった。市街地が最も多く 43%で、次いで水田・休耕地・畑が 31%である。河川敷や雑木林はそれほど多く分布していない。

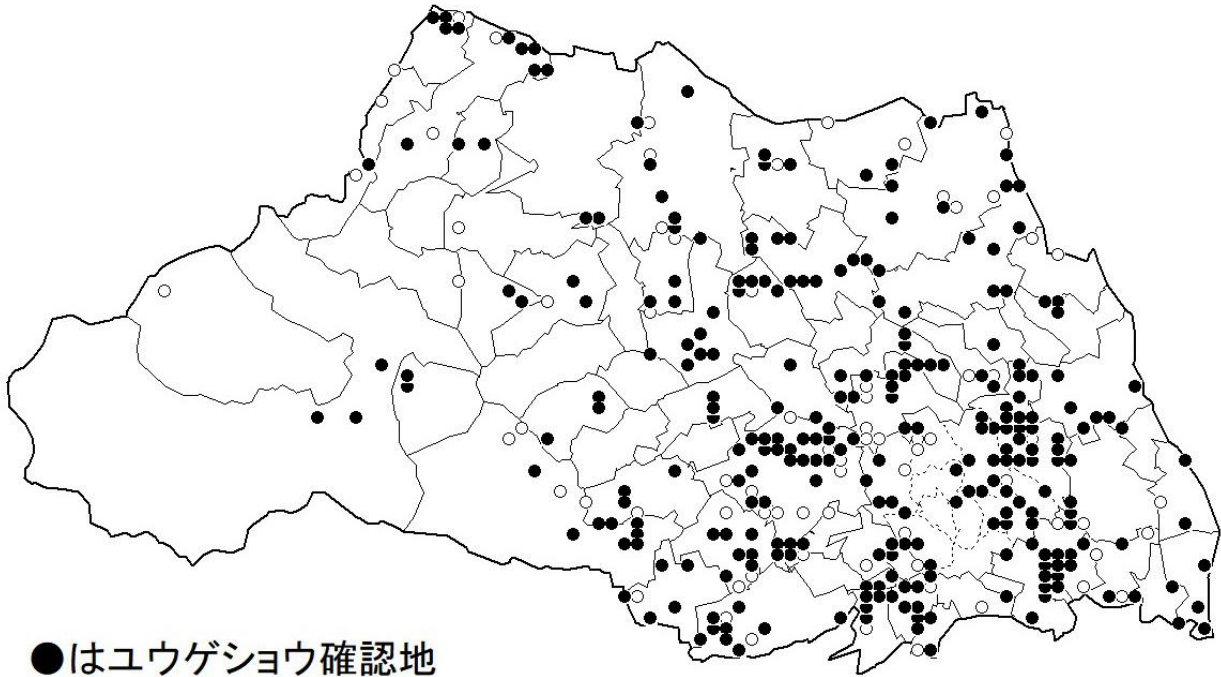
オッタチカタバミ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	32	8
河川敷	B	69	17.3
水田・休耕地・畑	C	125	31.4
市街地	D	172	43.2
合計		398	99.9

種の概要 類似種にカタバミがある。オッタチカタバミの場合、茎は立ち上がり、葉は茎に対して輪生状につくことが多いが、詳しく見ると節から2枚ずつ出ている。

本種の草丈は環境によりさまざま、高いものでは他物によりかかるようにして 50cm くらいまで成長するものから、低いものでは 5cm ほどのものまでさまざまである。植物体全体は黄緑一色となる。これに対してカタバミは立ち上がることはなく、はうことが特徴となる。植物体全体は深緑から帯紫となる。草丈が低い場合は両者の区別がしにくいことがある。そのときは托葉を見るとよい。カタバミの托葉が耳状に大きく開出する。オッタチカタバミの托葉は卵状に開くが目立つほどではない。

当該種の消長 オッタチカタバミとカタバミは同じところに共存していることが多い。オッタチカタバミがカタバミを圧迫しているようには感じられないが、分布域は急速に拡大した。1998 年には県内限定的分布であったものが、2011 年にはほぼ全県に広がり、現在では全県均一分布である。



分布状況 調査対象種ではないが報告件数が多いので、他の侵略的外来種との比較のため記載する。ほぼ県内全域から報告があった。埼玉県植物誌 1998 では限定的な分布であった。入間・狭山・川越・桶川・菖蒲・久喜・加須周辺と県南部の都県境市町村の分布である。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 27 区画で分布が確認されている。

環境別報告件数 報告件数 387 件であった。雑木林や河川敷には多くなく、市街地が圧倒的で 41%、2 番手の水田・休耕田・畑が 33% であって、後二者で 74% を占めている。

ユウゲシヨウ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	21	5.4
河川敷	B	80	20.7
水田・休耕田・畑	C	128	33.1
市街地	D	158	40.8
合計		387	100

種の概要

別名アカバナユウゲシヨウまたはアカバナノユウゲシヨウともいうが、標準名はユウゲシヨウで統一する。類似種にヒルザキツキミソウがある。ヒルザキツキミソウは開花すれば花径 5cm の大きな花となり、開花後、時間とともに花色が変化し、最初白色であったものがしぼむときには淡紅色となる。これに対してユウゲシヨウの花径は 1.5cm ほどで小さく、花色は最初からやや濃いめの淡紅色のまま変色することはない。両者は全く違う。

当該種の消長 明治年間に花卉として日本にもたらされたものが逸出し野生化したものとされる。県内では、埼玉県植物誌 1998 において限定的な分布であったが、その後拡大し、県レッドデータブック 2011 の段階では県内の半分のエリアを占めるようになり、現在においてはほぼ県内全域分布となった。外来種としては成長著しい特性があるといえよう。多年草であり、なお種子散布でも旺盛にひろがるようで、攪乱地を好み、現在では安定・定着しているといえる。



●はコセンダングサ確認地



分布状況 調査対象種ではないが報告件数が多いので、他の侵略的外来種との比較のため記載する。今回の調査では県内全域分布である。埼玉県植物誌 1998 では名栗・川島を除いた全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 41 区画で分布が確認されている。54 区画中の 11 区画は埼玉県分がわずかに飛び出ているだけの区画なので調査が行き届いていないことを考えると 41 区画分布は県内ほぼ全域分布といってよい。

環境別報告件数 報告件数 325 件であった。水田・休耕田・畑が 38.5%で筆頭である。次いで市街地で 30.2%であった。両者合わせて 68.7%のシェアを占める。雑木林にはあまりない。

コセンダングサ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	32	9.8
河川敷	B	70	21.5
水田・休耕田・畑	C	125	38.5
市街地	D	98	30.2
合計		325	100

種の概要 類似種にコシロノセンダングサ(シロバナセンダングサ)がある。コセンダングサの頭花はすべて筒状花からなり舌状花を持たない。これに対してコシロノセンダングサの頭花には数個の白色舌状花がつく。ところが中間的なタイプがあって、1つの株にできる頭花のいくつかがごく短い白色舌状花をわずかに持つ場合がある。この特徴はコセンダングサの個体変異とみてよいだろう。しかし、1株のほとんどの頭花がごく短い白色舌状花を持つようなばあいには、雑種アイノコセンダングサとして位置付けた方がよいと思う。

当該種の消長 江戸時代に侵入し、畑・草地・路傍・荒地に広がったとされる。攪乱された場所を好み、本県の記録でも 1998 年にはすでに県内くまなく分布していた。この状況は 2011 年でも変わることはなく、今年度 2017 年の状況もほとんど変わっていない。在来種とうまく共存関係を保っているように思える。ほぼ完全定着というべきだろう。



分布状況 調査対象種ではないが報告件数が多いので、他の侵略的外来種との比較のため記載する。今回の調査によると県南部、県西部に多くの報告があるが、県東部・県北部・秩父域にも広く分布している。埼玉県植物誌 1998 では秩父地域のうち大滝・荒川・秩父・横瀬・小鹿野・両神を除いた県内全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 40 区画で分布が確認されている。54 区画中の 11 区画は埼玉県分がわずかに飛び出ているだけの区画なので 40 区画分布は県内ほぼ全域分布とってよい。

アメリカフウロ

環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	17	5.3
河川敷	B	68	21.4
水田・休耕田・畑	C	117	36.8
市街地	D	116	36.5
合計		318	100

環境別報告件数 報告件数 318 件であった。水田・休耕田・畑 27.1%と市街地 36.5%が拮抗している。二者合わせて 73.3%となる。雑木林の出現率は低い。

種の概要 類似種にゲンノショウコがある。葉の形に相違がある。どちらも楓のように切れ込むが、アメリカフウロの切れ込みは深く裂片の幅が狭いのに対して、ゲンノショウコの切れ込みは浅く裂片の幅は広い。葉の形が不明瞭の場合は花卉の形を見る。アメリカフウロの花弁はサクラ類の花弁に似て先端がへこむ。ゲンノショウコの花弁の先端は円頭である。がく片の先端が棒状になる特徴は両者ともに同じである。

当該種の消長 昭和 8 年に京都で確認されたのが初出であるという。県内では、1998 年当時秩父域では確認されていなかったが、2011 年には県内ほぼ全域に広がり、2017 年現在、県内ほぼ全域分布を維持している。在来種と共存し、安定した状態にあるとみてよい。